

ヴィオラ・ダ・ガンバの手引

Handbook for the Viola da Gamba



© Minoru Yokota

日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会

Viola da Gamba Society of Japan

2018

このPDF版は、モノクロ版『ヴィオラ・ダ・ガンバの手引』を電子化したものです。
アカデミア・ミュージック株式会社から、カラー版の冊子を販売しています。

これは、ヴィオラ・ダ・ガンバの正しい知識と普及のために、日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会が一般に公開するものです。
印刷して構いませんが、PDFファイルの改変・複製・販売、紙媒体化による複写物・複製品の販売を禁止します。
テキストや図を引用・複写・転載する際には、出典を明記してください (p.13 参照)。

目次

はじめに		3
第1章 ヴィオラ・ダ・ガンバの話		4
● ガンバはどのような楽器？	ガンバ3種と調弦の譜例	4
● どのサイズを選ぶ？		5
● ガンバの構造	各部の名称／弦／フレット／弓	6
● ガンバの歴史	起源／ガンバはチェロの先祖ではありません イタリア／イギリス／フランス／ドイツ／日本／ガンバの再興	8 9
● ガンバを弾く	楽器の構え方／弓を持つ／押し弓と引き弓／左手指／調弦	12
● ガンバを始めようと思ったら	ガンバを買う／ガンバの教本	13
● ガンバのための曲を作曲しようと思ったら		13
● 本書を引用しようと思ったら		13
第2章 楽器の取り扱いと調整		14
● 取り扱いの注意点		15
● 各部の扱い方	楽器の胴／駒／魂柱／ペグ／弓／弦について	15
● 自分でする調整	弦の張り替え／フレットの巻き直し	18
● 専門家に任せる調整		19
第3章 レパートリーと文献		20
● 目次	凡例／省略記号／備考欄と叢書記号について	20
● イタリア	I／II／III	21
● イギリス	IV／V／VI／VII	23
● フランス	VIII／IX／X	24
● ドイツ	XI／XII／XIII	26
● 現代	XIV／参考文献	28
第4章 楽譜の読み方		29
● 楽譜の種類	自筆譜／手写譜／当時の出版譜／ファクシミリ版／個人全集／叢書／現代譜	30
● 楽譜の特徴	音符と休符の種類／音部記号／臨時記号／その他	31
● 文字譜(タブラチュア)		32
● ガンバ音楽の種類	声楽曲 — 多声楽曲 — 和声的な曲 — 舞曲 — 器楽曲 — 表題音楽	33
● 様式のちがいによる楽譜の読み方の特徴	イタリア／イギリス／フランス／ドイツ	34
● 楽譜の入手・閲覧方法	国内の楽譜販売店／海外からの入手先／国内音楽図書館	35

各章の執筆分担：神戸愉樹美(全)、井森真紀子(2)、青山比呂乃、斎藤智樹(3)、松岡由衣、Alexander Foxcroft-Knop (4)

全4章からなるこの『ヴィオラ・ダ・ガンバの手引』の他に、第1章のみを取り出した『ヴィオラ・ダ・ガンバの話』も発行しています。これは、楽器に関する必要最低限の知識を得たい方や、まだ楽器には触れた経験がない方にも、よき出発点となればと願って協会が頒布するものです。ご希望の方は協会にお尋ね下さい。

はじめに

日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会は1973年に発足したヴィオラ・ダ・ガンバ（以下ガンバ）奏者や愛好家の団体です。会員相互の交流や情報交換のために夏期講習会やコンソートの会を企画・開催したり、季刊の会報や研究誌『Discordia Concors』を発行したりしています。現在のところ全国規模でこうした活動をする日本唯一の団体で、プロ・アマの演奏家だけでなく、作曲家や楽器製作者、音楽学者のほか、販売店も加入しています。夏期講習会では、合奏の楽しみ方や独奏の演奏技術向上の手助けをするほか、講師による演奏や講義、楽器や調整に関する情報の提供もしています。会報では、各地の活動紹介、演奏会やセミナー、会員主催の合宿等の各種情報を発信しています。

この冊子は、日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会が、広くガンバを知って頂くために作成したものです。まだガンバをご存じない方から愛好家や専門家まで、折に触れて読み返して頂ける内容を目指しました。執筆者の構成は、こうした内容を長年にわたり研究・実践し、教育の場で経験を積んできた演奏家と、さまざまな視点からこれを検証する他分野の専門家からなっています。これらのメンバーで分担して執筆し、全章にわたるまとめは全員で行いました。

本書の執筆・編集に際しては、多くの会員から貴重なアドバイスを頂きました。とりわけ最終段階では、当協会発足当時の会員で元国立音楽大学学長の高野紀子先生にご高閲を賜りました。また表紙画像等の使用には、著名な絵本作家の横田稔氏からご快諾を頂きました。出版に関しては、アカデミア・ミュージック株式会社の佐久間和男社長にアドバイスを頂きました。こうして長く望まれていた冊子を、モノクロ版に次いでPDF版で世に送り出せるのも、皆様方のお力添えあつてのことです。執筆者一同、心から深く感謝しております。

ガンバの魅力発見への一助として、ご活用頂ければ幸いです。

2018年 日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会 研究誌準備委員会
青山比呂乃、井森真紀子、神戸愉樹美、斎藤智樹、松岡由衣（五十音順）

『Discordia Concors』（日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会の研究誌）への投稿の勧め

論文、原典史料の翻訳と紹介、論評と書評、学位論文の要約などを募集しています。執筆要領は、ウェブサイトに掲載しますので奮ってご投稿下さい。

- Vol.1 1973 高野紀子「初期のヴィオラ・ダ・ガンバとその音楽」
マーコ・パリス「Tenor I or Alto?」(レオ・トレーナー/佐藤一也/山科高康 共訳)
- Vol.2 1986 樋口隆一「バッハとヴィオラ・ダ・ガンバをめぐる基本的な問題」
大橋敏成「カール・フリードリッヒ・アーベルの肖像画をめぐる」
- Vol.3 1996 Ch.シンプソン『ディヴィジョン・ヴァイオリン』第一部(佐藤一也・塚本孝訳)
- Vol.4 2002 Ch.シンプソン『ディヴィジョン・ヴァイオリン』第二部、第三部(佐藤一也・塚本孝訳)
- Vol.5 2010 坂本利文「タブラチュアの歴史と奏法」

第1章 ヴィオラ・ダ・ガンバの話

What is Viola da Gamba?

ヴィオラ・ダ・ガンバとはどのような楽器なのでしょう。その起源や歴史、魅力をまとめました。どなたにも知っておいていただきたい内容です。

General understanding of the instrument including its construction, origin, history, characteristics and playing method.

ガンバはどのような楽器？

ようこそ、ヴィオラ・ダ・ガンバの世界へ。

ヴィオラ・ダ・ガンバは、16~18世紀に西欧の宮廷や教会で奏でられた弓奏擦弦^{さつげん}楽器です。「ガンバ」はイタリア語で脚を意味し、両脚の間に挟んで構えます。弦の数は6本で、ガット(羊腸)弦を用います。指板にはフレットを巻きます(詳しくは p.7)。弓は右手の掌を左に向けてスプーンを持つように構え、中指を直接弓毛にかけて弦をこすります。調弦は4度、4度、3度、4度、4度の間隔です(p. 5の譜例参照)。ヴィオラ・ダ・ガンバ(以下、ガンバ)はイタリア語名です。フランス語ではヴィオール、英語ではヴァイオル、ドイツ語ではガンベと呼びます。

ガンバは、はじいて音を出す撥弦^{はつげん}楽器を、弓で擦ったのをきっかけとして生まれた楽器とされています。チェロと似ているように見えますが、ガンバはチェロの先祖ではありません。弓の構え方、調弦、フレットの有無、楽器の構造だけでなく、当初に奏でた人々の社会的地位も異なっていました。(詳しくは p.8)

ガンバの魅力は、豊かに共鳴する響きと優雅な音色にあります。同時代の他の楽器と同様に人の声を理想として生まれた楽器で、低音域から順にバス、テノール、トレブルがよく使われます。これらを組み合わせたガンバ・コンソートでは、ガンバならではの響きを味わえるので虜になる人も多いです。和声^{ホモフォニー}的な曲の美しさは格別ですが、多声^{ポリフォニー}楽曲では各声部が対等で互いに個性を発揮できる魅力があります。コンソートは、初心者にとっても比較的仲間に加わりやすいジャンルです。

特にバスでは名人芸を聞かせる独奏曲も多く、一人で和音と旋律を同時に奏でて楽しめます。

また、ガンバに限らず、リュートやリコーダー、トラヴェルソ、バロック・ヴァイオリンなどの古楽器仲間がいれば、合奏はもちろん、通奏低音を受け持って伴奏することもできます。

主なレパートリーは、ルネサンスからバロックまでのイタリア、フランス、イギリス、ドイツの作品です。合奏曲ではダウランド J. Dowland の〈涙のパヴァーヌ〉、大編成の曲ではバッハ J.S. Bach の《マタイ受難曲》のアリア〈来たれ、甘き十字架〉(自筆譜は p. 10)などが、よく知られています。現代の名曲も増えています。(詳しくは p.9 以下と第3章参照)

神が創造された最高のもの、人間を模倣できる楽器がいちばん良い楽器である。
ヴィオールは言葉を語れない点をのぞいて、何ひとつ人の声と変るところがない。

ジャン・ルソー『ヴィオール概論』関根敏子・神戸樹美共訳(アカデミア・ミュージック 1988):
J. Rousseau, *Traite de la Viole*, Paris 1687.

ガンバ3種と調弦の譜例



各サイズの音程の関係は、テノールがバスの4度上、トレブルはバスの1オクターブ上。

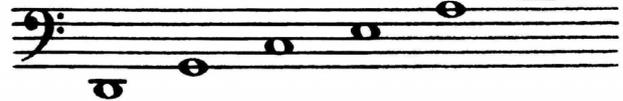
トレブル



テノール



バス



左から バス、トレブル、テノール

プレトリウス『音楽大全 II 楽器誌』郡司すみ訳(エイデル研究所 2000)

M. Praetorius, *Syntagma Musicum II De Organographia*, Wolfenbüttel 1619.

どのサイズを選ぶ?

バス・ガンバを選べば、合奏の時に音楽の土台となって全体を支え、みんなをまとめる気分を味わうことができます。バス同士の二重奏や独奏曲のレパートリーも豊富です。独奏をするならバス・ガンバの習得は欠かせません。

はじめからコンソートに焦点を絞りたい人には、テノール・ガンバをお勧めします。ガンバの中でもとりわけ人の声に近い響きに魅力があって、コンソートには欠かせない楽器だからです。サイズもほどよく、初心者にも楽に構えられます。中音域を演奏する人は比較的少ないので、初心者のうちから合奏に誘ってもらえる機会が多いようです。また、テノールから始めると、トレブルにもバスにも持ち替えやすいです。

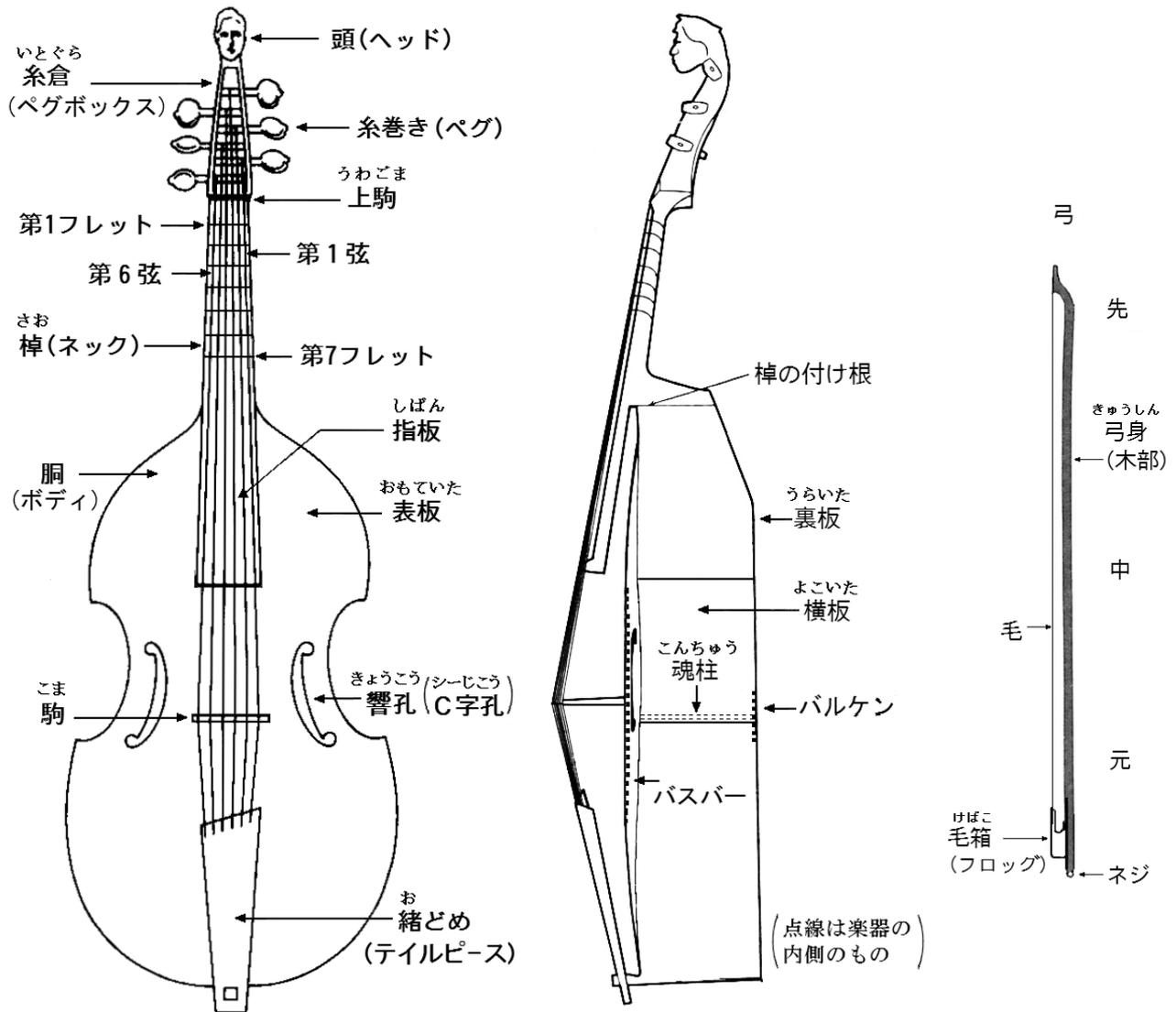
トレブルは、指先が器用で繊細なニュアンスを大切に思う人に向いています。合奏が主なレパートリーとなりますが、フランス後期バロックの独奏曲も楽しむことができます。トレブル・ガンバは、ドイツ語ではディスクアント、フランス語ではドゥシュと呼びます。楽器のサイズはヴァイオリンに厚みを加えた程度なので、持ち運びにも便利です。

この他にも各地・各時代でさまざまな楽器が使われました。イタリアでヴィオラ・バスターダが、イギリスでアルト・ガンバ、リラ・ヴァイオル、ディヴィジョン・ヴァイオルが、フランスで7弦バス・ガンバ、パルドゥシュが、またヴィオローネは18世紀末まで各地で広く使われました(詳しくはp.9以下)。ドイツとイギリスでは後にバリトンが愛好されました。

リコーダー奏者がバス、テノール、アルト、ソプラノを吹き分けるのと同様に、ガンバ奏者もそれぞれのサイズを持ち替えられるのが理想です。

ガンバの構造

各部の名称



擦弦楽器は、弓でこすった弦の振動が表板→魂柱→裏板へと伝わって、音楽的な響きとなります。胴内をのぞかないと見えませんが、表板の裏には、駒足の低音側にバスバーというカ木、高音側に魂柱があります。振動は補強木のバルケンで受け止められ胴全体に伝わります。その振動が響孔で拡大されて耳に届くという仕組みになっています。また、表板は松材、他の部分は楓材です。これらの仕組みや素材はガンバ属もヴァイオリン属も同じですが、各部分の構造や削り方、材質の一つひとつがあいまってガンバ特有の音色を創り出しています。

ヴァイオリン属とちがう構造は、平らな裏板、なだらかな肩線、表板の響孔は一般的にはC字孔(ヴァイオリン属はF字孔)、尖っていない剣先(胴のくびれの両端の角)、今日のチェロについているエンドピンがない等です。ガンバならではの箱鳴りや共鳴は、これらの構造からも生まれます。

ガンバは、表板と裏板が横板とぴったり付き合わせて継がれています。これには狂いのない銘木や高度な技術が必要で、古くは高貴な人々の雇った名工によって作られました。一方、ヴァイオリン属は表板と裏板が横板の外側に出ているので、製作も修理もしやすいです。

弦の張力は、表板と魂柱を通して裏板にかかります。ヴァイオリン属の裏板はふくらんでいるため張力を押し返す力が強く、大きな音で弾くことができます。一方、ガンバは裏板が平らなので、補強木で補ってはいますが強度は低く、大音量を出そうと弦を強く張ると壊れてしまいます。ガンバは共鳴や繊細な音を大切に作る楽器で、情動がほとばしる旋律を激しく大きな音で奏でるのには向いていません。ガンバが古典派、ロマン派の時代に弾かれなくなっていった原因がここにあります。

ガンバ・コンソートの響きが美しく調和する理由は、トレブル、テノール、バスの楽器の胴内空気量の比率が理にかなっているところにあります。バスの弦の長さを1とすると、トレブルは1/2、テノールは3/4です。バスの胴内空気量を1とすると、トレブルが1/2の3乗、テノールが3/4の3乗のとき、理想的な響きのバランスとなるのです。あごと鎖骨で構えるヴァイオリン属は、楽器に厚みがあると構えにくいので、横板を幅広くすることができませんが、脚に挟むガンバは横板の幅を理想的に取ることができるからです。

弦

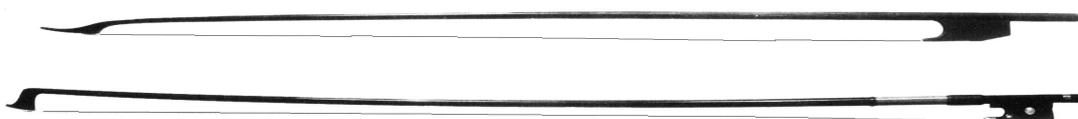
リュートと同様にガット(羊腸)を用います。ガット弦は湿気によって音程が変化しやすいのですが、自然な美しい音色は他の材質では得られません。高音弦には裸ガット弦を、低音弦にはアルミ、銀、銀メッキ、銅線をコイル状にガットに巻き付けたものを用います。こうした低音弦が17世紀に考案されました。低音弦まで裸ガットを用いると太さが必要となり、押えにくく音もガサつくという人がいますが、この独特な音色が好きな人もいます。

フレット

フレットは、指板に弦と同じガットを巻いたものです。指で弦を押さえる点を示すために半音間隔で7つ巻きます。フレットの効用は、どの音でも開放弦と同じような澄んだ音色と長い余韻が得られるところにあって、ガンバの特徴となっています。こうした音の理想は、ガンバの起源がフレット付の撥弦楽器に由来するからです。ギターのように固定されてはいないので、フレットの間隔を自分で動かして音程を微調整できます。使い古しの弦を捨てずに取っておき、フレットを張り替える際に再利用します。

弓

木部の形状や毛箱の構造は、16～18世紀へと時代が下るにつれ、国や時代のスタイルに応じて変化しました。形状は、モダン・ヴァイオリンの弓とちがって、先が細くて木部は内側に反っていません(下図)。木の材質によって音色が異なります。かつては、中国産の木が良いとされていました(ルソー 1687)が、実際にはいろいろな木が使われていました。現在はスネーク・ウッドを用いることが多いです。毛には馬の尾が使われ、直接毛に指をかけて演奏します。



ガンバの弓
1700年頃
ヴァイオリンの弓
1790年頃

The New Grove Dictionary of Music and Musicians, London 1980. "Bow"

(各項目の取り扱いと調整については pp.14-19 を参照)

ガンバの歴史

起源

聖書には、指や爪ではじくりやキタラが登場しますが、弓でこする楽器はありません。

擦弦楽器の最も古い記録は10世紀初頭のペルシャにあって、イスラム教徒による新興の楽器であったことがわかります。イスラム教の勢力の拡大と共に西に広まり、擦弦楽器が得意な民族であるムーア人によってイベリア半島にももたらされました。半島の宮廷では、15世紀中頃から貴族みずからが奏する撥弦楽器ヴィウエラが愛好されていましたが、それをムーア人の楽士がたまたま^{アルコ}弓でこすり、ヴィウエラ・デ・アルコ(ガンバの古称)が生じたのです。(右図)

この楽器がローマで見られるようになったのは、スペインのボルジア家ロドリゴがローマ教皇アレクサンデル6世に即位した1492年のことです。教皇に伴ってローマ入りした楽団が携えた楽器に含まれていました。その後、貴族同士の結婚などを機にイタリアの諸都市ミラノ、フェラーラ、ナポリ、ウルビーノ、フィレンツェの諸侯に伝わり、キリスト教国の貴族が嗜む楽器として他の西欧諸国にも受け入れられました。

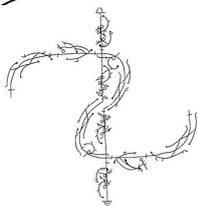
16世紀になると、現在と同形のガンバが絵画の中にたくさん見られるようになります。たとえば、ラファエロの〈聖女チェチリアと聖人たち〉(1513年頃)に描かれた楽器には、横板が広くなだらかな肩線、平らな裏板、C字孔、6個の糸巻き、少しふくらみのある表板に駒が立っているなど、現在のガンバと同じ特徴が見られます。

ガンバはチェロの先祖ではありません

ガンバもチェロも弓奏擦弦楽器であることは同じですが、ガンバは両脚で支えるガンバ属で、チェロはヴァイオリンやヴィオラと同様に腕(イタリア語でブラッチョ)に構えるブラッチョ属です。チェロは大きくて腕に構えられないので、脚の間に置いて弾くのです。また、奏でる人々の社会的地位も異なっていて、ガンバは貴族が嗜む楽器だったのに比べ、ヴァイオリンは楽器を弾いて生業とする職業人のためのものでした。双方とも16世紀初頭に登場しましたが、ガンバが先に栄えたので、チェロの先祖と誤解されることがあります。



天使がヴィウエラ・デ・アルコを弾く図
c.1500, Sardinian school:
Museo Nazionale, Cagliari
I. Woodfield, *The Early History of
the Viol*, Cambridge 1984, p. 55.



ヴァイオリンを弾く人は、貴族の踊りの先生を兼ねることが多かったので、弾きながら歩き回ったり踊りのステップを教えなければなりません。そのため、上半身で楽器を支える構えとなり、弓の持ち方もオーバーハンドとなりました。左腕をねじるヴァイオリンの構え方は、世界の擦弦楽器の中でも例外的といえます。ペルシャより東の地域の擦弦楽器、例えば胡弓やサラング、馬頭琴、二胡などは、ガンバと同じように構えます。

イタリア

16世紀を通して声楽曲がガンバ同士、またはリコーダーやリュートとの合奏で愛奏されました。ガナッシ S. Ganassi は、演奏のための初めての教本『レゴラ・ルベルティーナ』(1542/3)を出版しました。一方で、時間を分割するという西洋特有の考え方に基づいて、音価を分割して細かい音符で装飾的に即興する技の修得が潮流となり、オルティス D. Ortiz は、ガンバの技巧的な奏法を初めて体系的にまとめた『ガンバの音楽とクラウズラについての意義ある入門書』(1543)* を出版しました。さらに超絶技巧へと発展させたヴィオラ・バスターダの音楽が流行し、1640年頃にはヴァイオリン属にその役割を譲りました。16世紀後半以後には、テノールより1オクターブ下のヴィオローネが登場して低音を支えました。



現存する16世紀後半のガンバ

Antonio Ciciliano 作

Kunsthistorisches Museum, Vienna, C.75

I. Woodfield, *ibid.*, p. 127.

* 原文の表題は長いが、高野紀子氏は「クラウズラ語法概論」(『Discordia Concors』Vol.1, p.4: 本書 p.3 参照)と訳し、平尾雅子氏は『オルティス 変奏論』(アルテスパブリッシング 2010)としています。

イギリス



シンプソンがガンバを弾く図
Chr. Simpson, *The Division-Viol*, London
1665.

ヘンリー8世の頃、イギリスにガンバ・コンソートが紹介されました。16世紀中頃には支配的階層であったジェントルマン必須の嗜みでもありました。ダウランドやパーセル H. Purcell をはじめとする多くの作曲家が、多声楽曲と和声的な曲を自由に取り入れて、ガンバ・コンソートならではの響きが楽しめる作品を残しました。アルト・ガンバが加わると、いっそう響きが整う作品もあります。

イギリスで好まれたリラ・ヴァイオルは独奏用の楽器で、調弦を変えていろいろな響きを楽しむためにタブラチュア(文字譜、詳しくは p.32)を用いました。

ディヴィジョン・ヴァイオルは小型のバスです。この楽器を用いて、即興的に高度な技術を駆使する「ディヴィジョン」奏法が流行しました。有名な譜例付き理論書として、シンプソン Chr. Simpson の『ディヴィジョン・ヴァイオル』(1665)** があります。

** 和訳と楽譜の一部は、『Discordia Concors』Vol.3(1996)とVol.4(2002)にあります。(本書 p.3 参照)

フランス

ヴェルサイユ宮殿を中心に、宮廷音楽家がガンバのために数多く作曲し、優美な旋律、華麗な装飾の独特のフランス様式を完成させました。サント・コロンプ Ste. Colombe、マレ M. Marais、クープラン F. Couperin、フォルクレ A. Forqueray 等の作曲家が有名です。曲の種類としては、通奏低音を伴う舞曲や標題音楽が多くあります。建築、家具、舞踏などに共通して見られる王の趣味が音楽にも求められて、弾き方に綿密な指示のある楽譜が王の庇護のもとで出版されました。

17 世紀後半には低音側に 1 本付け加えた 7 本弦のバス・ガンバが考案されました。現在もフランスの作品を弾く際によく用いられます。

18 世紀に入ると、トレブルより高い音域のパルドゥッシュ(5 弦か 6 弦)が貴婦人たちに愛用されました。



マレの《ヴィオール曲集第 5 巻》通奏低音パートの表紙 1725
Ruedy Ebner, Musik-Akademie, Basel

ドイツ

選帝侯の宮廷では室内楽が、また教会音楽が一般市民にも提供されました。ガンバは、とくに天国のような静けさやキリストの死にまつわる場面に、効果的に用いられることが多いです。シュッツ H. Schütz 《十字架上の 7 つの言葉》、バッハ J. S. Bach 《マタイ受難曲》の〈来たれ、甘き十字架〉(下記の楽譜)、《ヨハネ受難曲》の〈すべては終わりぬ〉などが有名です。ドイツのガンバ音楽は混合様式といわれ、イタリア、フランス、イギリスの音楽的特徴を取り込んだ独特な様式となっています。



バッハの自筆ガンバ・パート
来たれ、甘き十字架 《マタイ受難曲》より
Neue Bach-Ausgabe Serie II, Band 5a. BA/DVfM 5039, p. VIII

前古典派の作曲家でガンバの名手アーベル K. Fr. Abel は、バッハ C. Ph. E. Bachとともにベルリンで活躍しました。ゲーテは「ガンバで幸運と喝采をあびた最後の音楽家」とアーベルを称賛しています(『真実と詩人』8巻)。

(詳しい内容やレパートリーについては pp. 20-28、楽譜の読み方については pp. 29-35 を参照)

日本

安土桃山時代に来日したイエズス会宣教師によって、ガンバが紹介されました。信長、秀吉たちがガンバ演奏を聞いたこと、また天正少年使節がガンバを演奏したことなどが、1562~1607年の文献に残されています。しかし、禁教により江戸時代にはほとんど西洋音楽は聴かれなかったため、バロック音楽に相当するものは日本には伝わりませんでした。

ガンバの再興

本来ガンバは、貴族の少人数向けサロンで演奏されるのが常でした。18世紀の市民革命以後になると、音楽を聴く層が市民へと拡大し演奏会場が広くなりました。その結果、大音量の出せる楽器が求められて、ガンバの役割は次第にヴァイオリン属にとってかわられました。古典派やロマン派の時代にはガンバが登場することはごく稀で、楽器は納屋に眠っていました。19世紀末になり、ガンバの再興に力を尽くす人々によって掘り起こされました。

イギリスのドルメッチ、フランスのカサデュシュ、ドイツの「青年音楽運動」、アメリカのベン・スタッドなどが、ガンバを盛んに演奏しました。また、1933年にはスイスのバーゼルにスコラ・カントルムが設立されて、音楽学の研究に基づいて古楽器の本来の響きや当時の奏法を追求する動きが始まりました。

日本でも、大正時代の海外文化に対する羨望から、1924年に宮沢賢治は『春と修羅』の詩句にガンバを詠い、1929年には黒沢敬一がドルメッチ製の楽器を携えて英国から帰国しました。第2次世界大戦後の1950年代中頃から再び知られるようになり、菊地俊一、カール・ヴェンデルシュタイン、その後、大橋敏成、高野紀子、レオ・トレーナーらも活躍しガンバを国内に普及させました。1965年からは、音楽を専攻できる学校教育機関がガンバを教科に取り込み、教育的な観点から合奏や弦楽器修得を目的に導入したり、西洋音楽の深い理解のために音楽学の科目として取り上げたりしました。次第に、専攻科目として扱う大学も現れました。時代順には、上野学園(大学教育学科、中学、大学古楽科)、国立音楽大学、武蔵野音楽大学、東海大学、フェリス女学院大学、同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、桐朋学園大学、東京芸術大学、京都市立芸術大学でもガンバが学べるようになりました。それぞれに設置までの前史があり、先達の努力によって今日の発展があります。

1997年より、ガンバ演奏家養成の目的でバッハ・アーベル・コンクール(ドイツ)も開催されています。

イギリスでヴィオラ・ダ・ガンバ協会が1948年に設立されたのを皮切りに、米国では1963年、日本にも1973年に協会が設立されました。1984、86年には東京でヴィオラ・ダ・ガンバ作曲コンクールが開催されました。21世紀の現代も、ガンバ特有の響きを生かした作品が国内外で次々と生まれています。



© Minoru Yokota

ガンバを弾く

楽器の構え方

椅子の前3分の1くらいに浅く腰掛けます。お尻の座骨が椅子を感じるくらいに背筋を伸ばし、腰は上半身をしっかり支え、上半身と手足は力を抜きます。

足先はつま先をハの字に開き、左足をやや前に出します。バスはふくらはぎで、テノールはふくらはぎのやや上で、トレブルは膝で構えます。脚に力を入れて強くはさむのではなく、バスでは右表板の角は右ふ



くらはぎに、左裏板の角を左ふくらはぎにのせるようにし、トレブルは膝にはさんで安定させます。トレブルでは左右の足首をからめてもかまいません。楽器の中心は背骨より左側に来るようにします。楽器の向きは、高音部が弾きやすいようにやや右に向けます。奏者から見て右横板は膝の内側に入っていますが、左横板は膝の外側に出ています(写真参照)。

弓を持つ

歴史的にはさまざまな持ち方がありますが、ガンバには指で直接毛に触れて弦を操作する特徴があるため、現在では次のような持ち方が大勢を占めています。右手の掌は左に向けて、弓の重心から毛箱に近い部分で、スプーンを持つように構えます。中指の第一関節を直接毛に掛け、その力の入れ加減で音色をつくります。



押し弓と引き弓

強拍はアップ・ボウ=押し弓(∨)、つまり弓先から弓元に向かう弓使いで弾きます。弱拍はダウン・ボウ=引き弓(∟)を用います。ヴァイオリン属とは逆です。

左手指



人差し指から小指の4本を使ってフレットのきわをしっかりと押えます。親指はネックの裏側で、中指と向かい合うように当てます。重音を弾く時は、複数の弦を人差し指や小指で同時に押える運指も用います。

ここでは、ガンバ特有の事柄を少し紹介しました。実際に弓を持ったり、左手指を押さえたりして弾くためには、さらに教本などを参照したり教室などに通うとよいでしょう。

調弦

16-18 世紀には、時代や地域によりさまざまなピッチが用いられていましたが、現代では古楽のピッチは $a^1=415\text{Hz}$ で合わせることが多いです。モダン楽器のような 12 音均等の平均律ではなく、3度、5度等の音程間隔を微妙に調整した音律にすると、和音が共鳴して美しく響きます。

ガンバを始めようと思ったら

ガンバを買う

ガンバにはヴァイオリンのようにサイズの規格がなく、国や時代によってもさまざまな特徴があります。めざす音楽に合う楽器を買ってしまう前に、自分の手に合うサイズを選ぶことが大切です。借りられるなら、買う前に借りて試してみることをお勧めします。その際には楽器の取り扱い(詳しくは pp. 14-19)に充分気を配りましょう。

楽器の値段はピンからキリまでありますが、目安としては楽器と弓とケース(ソフトケースとハードケースがあります)で、バスは 70-200 万円、テノールは 60-80 万円、トレブルは 45-85 万円くらいです。先生や知人のついでで求めたり楽器店で購入するほか、国内・海外の製作家に依頼することもできます。楽器店のウェブサイトや古楽関係の雑誌等に、中古楽器の情報が掲載されていることもあります。

ガンバの教本

ガンバの初心者向け教本は、海外ではたくさん出版されています。邦訳ではアウグスト・ヴェンツィンガー著『ヴィオラ・ダ・ガンバ教本』全2巻(アカデミア・ミュージック刊)があります。第1巻(2015)では楽器の持ち方や楽譜の読み方、全6本の弦を自由に弾けるように学び、第2巻(2010)ではハイポジションまで、ガンバの基礎を理解しながら学べます。

ガンバのための曲を作曲しようと思ったら

作曲する際に役に立つように、ガンバの特徴を説明した『ヴィオラ・ダ・ガンバ 作曲のための手引書』(アカデミア・ミュージック刊)があります。本書第3章 XIV 現代(p. 28 参照)の項目に挙げた作曲家も使った冊子です。'Handbook for Composing for the Viola da Gamba' (英語)もあります。協会にお尋ね下さい。

本書を引用しようと思ったら

他人の著作物から文章や画像、表などを引用する際には、出典(著者名、書名、出版社名、出版年、ページ数など)を明記する必要があると、著作権法に定められています。実際の書き方は、投稿先の規定に合わせる必要がありますが、例えば次のように記してください。

日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会研究誌準備委員会『ヴィオラ・ダ・ガンバの手引』(アカデミア・ミュージック, 2018) p. 〇〇. (引用頁が複数の場合は、pp. 〇〇-〇〇.)

英文で引用するときは、次のように記してください。

Journal Committee of the Viola da Gamba Society of Japan eds, *Handbook for the Viola da Gamba*, (Academia Music, 2018), [Japanese], p. 〇〇. (引用頁が複数の場合は、pp. 〇〇-〇〇.)

第2章 楽器の取り扱いと調整

Handling and Maintenance of the Viola da Gamba

あなたの楽器をいつもよい状態にしておくために

For the best condition of your viols



© Minoru Yokota

楽器をよい状態にしておくことは、楽器を弾くことの一部です。安心して楽器に接するための要点を「取り扱いの注意点」に、また、心地よい響きを得るための基本的なことから「各部の扱い方」にまとめました。自分でできる調整と専門家に任せなければいけないことも記しました。

●取扱いの注意点

持ち運ぶときは、常に楽器に気を配り、周りの人にも迷惑を掛けないように注意します。直射日光に長くさらされないように、また濡れているところも避けます。電車に乗るときは余裕を持ってでかけ、混雑する時間と場所も避けます。乗り降りの際は、楽器を先にするなど気を配りましょう。網棚に載せる際には、ソフトケースから弓ケースや小物が滑り落ちないように気を付け、乗せたら置き忘れないようにします。雨が内部に入ってしまうケースの場合は、子ども用のレインコートを着せるのも一案です。

車で運搬するときには、事故から楽器を守るために、なるべくハードケースを使うことが望ましいです。エアコンを上手に利用しても太陽熱が心配なときには断熱シートで覆います。

楽器にとっての快適な温度や湿度は人間と同じです。湿度は60%前後で一定させるのが理想ですが、梅雨時などに湿度が80~90%に上がったなら除湿し、冬に40%を切ったら加湿します。直射日光やストーブの前、またエアコンの風が直接当たる場所も避けます。保管場所も含めてエアコン等を適宜利用します。

楽器に触る前に手を洗い、木製の楽器に傷が付かないように、金属製の装飾品や時計などを外します。楽器を持ち上げるときには棹(ネック)の付け根を持ちます。フレットが巻いてある部分を握ると、せっかく音程を調整してあるフレットがずれて音が狂ってしまうからです。楽器の安全に気を配り、ぶつけないように慎重に扱い、硬い物を落としたり飲物をこぼさないようにします。一休みするときにも楽器の置き方には気をつけます。楽器を構えるときには、ニスの保護のためになるべく素脚を避けます。

弓は使う時に張り、弾き終わったらゆるめます。毛の張り具合は好みで良いのですが、湿度が下がると弓毛が張りすぎになることがあります。弾き心地がおかしいとおもったら適宜加減をします。

弾き終わったら、楽器全体についての皮脂、汗、松脂などを柔らかい布で拭きます。化学的な艶出しは使いません。弦は原則としてゆるめませんが、梅雨時や雨上がりには、その後の乾燥で弦が切れないように、1弦と2弦を半音程度下げおきます。弓は毛をゆるめて木部についての松脂や汗を拭い、楽器と弓はケースに入れ、安全な場所に置きます。

長期にわたって楽器を弾かないときには、ケースに納めたのち、倒れたり踏まれたりしない場所に置きます。弦はゆるめすぎず高音弦を半音程度下げるに留めます。

各部の扱い方

楽器のよい響きとは、楽器を構えて弓で擦ったときに素直に振動が伝わっている音、その楽器本来の健康な音のことです。これを得るためには、よい体験に勝るものはありませんが、楽器についての最低限の知識も必要です。

(各部の名称と、楽器の振動の仕組みについては p.6 を参照)

楽器の胴

表板、裏板、横板は二カワ(膠)で隙間なく接着されています。胴にはネックが差し込まれ、ネックには指板が接着されています。これらの接着部分が剥がれていたり板が割れていたりすると、弦の振動が楽器全体に伝わらなったり、雑音が出ることがあります。割れは、木

の伸縮によっても起こることがありますが、人為的に起こってしまうこともあります。楽器を椅子にぶつけたり、譜面台を倒したりも禁物です。

ニカワは、楽器を通常の状態では何百年でも接着していますが、修理もしやすい優れた接着剤です。もしニカワが剥がれたり板が割れてしまったら、長期にわたって放置しておくとも楽器本体が変形して修復がしにくくなるので、速やかに専門家へ連絡しましょう。

駒

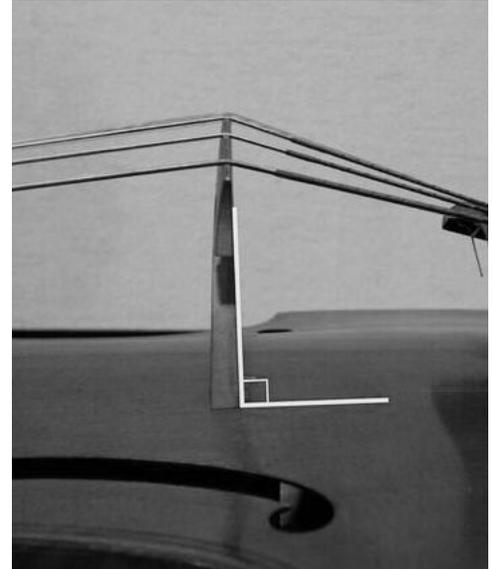
駒は楓材で、弦の振動を楽器の胴へ伝えるために表板に隙間なく直角に立てられていて(写真上)*、接着はされていません。駒足と表板の間にわずかでも隙間があると弦の振動が伝わらず、健康な音が得られないので、駒足と胴の接面に隙間の黒い陰があったら(写真下)正しい位置に直します。

駒が弦に引っ張られて指板側に傾いていたら、楽器を寝かせて一旦全ての弦を少しだけゆるめ、駒に両手を添えて正しい角度にし、そのまま片手で支えながら弦を少しずつ巻き戻しましょう。弦がゆるんでいる時に横方向に力が加わると駒が移動してしまうので、駒を横へずらさない様に、動いてしまったら元の位置に戻しましょう。

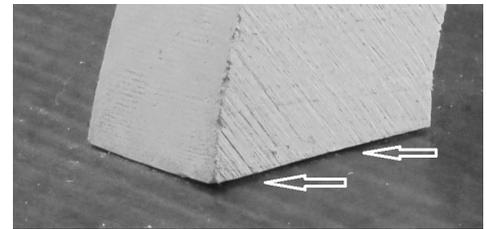
この作業に不安を感じる場合は、専門家か信頼できる先輩に依頼してください。駒には強い張力がかかっているので、弦を張ったまま駒を動かすことは熟練者でも注意深く行なう必要があります。

弦が駒に接する小さな溝は、弦の太さの 1/3 くらいの深さにします。溝が浅すぎると両端の弦は駒から外れることもあり、溝が深すぎると余分な駒の部分が弦の振動を妨げて良い音がしません。この調整は、専門家に依頼しましょう。

* 横から見て台形に木取りしてある駒の場合には、直角であることより胴との接着面に隙間がない方が重要です。



表板と駒が直角になっている状態



低音側の駒足をテールピース側から見たところ。正しい角度になっていないと駒足と胴の接面に黒い陰がみえます。

魂柱

魂柱は胴の中で表板と裏板の間に接着せずに立ててある柱で、表板の振動を裏板に伝えるものです。ほどよい長さであることが重要です。短すぎるときに弦をゆるめたり、梅雨時などで湿度が上がったりすると倒れることがあります。これは弦の張力や表板自体の押さえる力が弱まるためです。逆に長すぎると、内側から押す力で表板が曲がったり、ときにはヒビが入ることもあります。楽器にとって表板のトラブルは致命傷になるので、調整は専門家に依頼しましょう。短すぎる場合は新しい魂柱に取り替えてもらいましょう。

音を聞いて異常がわかるようになるには経験が必要です。専門家によるサポートを受けた後などに、魂柱がほどよく立っている時の楽器の響きを覚えておくと、その後の変化に気づきやすくなります。おかしいと思ったら、弦をゆるめて表板へのストレスを和らげます。魂

柱が倒れている楽器を移動させる場合には、表板に力が掛からないように弦をゆるめる必要があります。テールピースと胴の間にタオルなどをあてがうと表板に傷を付けずに済みます。

ペグ

ペグのよいコンディションとは、調弦の際に止めたい箇所ですとピタリと止まる状態です。調子が悪いときは、楽器に問題がある場合と調弦の技術が充分でない場合とがあります。新しい楽器は、通常は毎日調弦すれば3カ月くらいで木が馴染んで良い状態になります。硬くて回らない場合は、ペグとペグの穴の接点に糸巻き調整剤(スムーサー)を、止まらないペグにはチョークを付けますが、作業は1本ずつ行います。ただし付ければよいとは限らず、それらを布で拭き取るだけで改善されることもあります。

不具合を感じた時には、まず弦の巻き方が正しいか次頁を参考に確認します。長期使用で糸倉の穴やペグが摩耗していびつになって止まらない場合は、専門家に相談しましょう。

巻き方や楽器に問題がないのに上手くペグが回せない場合には、調弦に際して3つのことを意識してみましょう。まず、正しい音の高さを想像する耳を養うことです。次に音程がよくわかる安定したボウイングを目差します。3つ目は必要なだけペグを少しずつ回せるように、左手の筋力を高めてコントロールできるようにすることです。

弓

細い木から彫って作ってあるので、先端が折れたりしないように丁寧に取り扱い、置く場所にも気を配りましょう。弓の木部と毛箱に隙間が生じたり、ネジがスムーズに回らなくなったら専門家に見てもらいましょう。

弓の毛はほどよく張って、擦る部分にだけ松脂をつけて使い、弾き終わったらゆるめます。松脂のノリや発音が悪くなったら専門家に毛替えを依頼します。使用状況によりますが、毎日弾いて一年に一度ぐらいでしょうか。松脂は、塗り過ぎるとざらついた音になるので、ほどよい加減を覚えましょう。頻繁でなければタオルで拭き取っても構いません。

松脂は、ガンバ専用が少ないのでヴァイオリンやヴィオラ、チェロ用を使います。コントラバス用は柔らかくベタ付くので適しません。割れやすいので硬い床などに落とさないようにして、表面がいつも平らになるように使います。

弦について

ガット(羊腸)弦は、湿度が高いと伸びて音程が下がり、乾燥すると高くなる特徴があります。傷んでくるとガットの繊維が切れて、ささくれて音が鈍くなります。応急的にはささくれを丁寧に切り取って使いますが、更に傷んで弦が切れる前に張り替えます。新しい弦は、しばらくは音が下がるので大事な演奏の直前に替えないで済むように心掛けます。また、汗を吸収して古くなると音程が合わなくなるので、気がついたら替え時です。その内の古い裸ガット弦は、フレットに再利用するので捨てずに保管します。

低音弦に使う巻き弦は、芯のガットに金属が巻いてありますが、湿度が40%より低くなると芯との間が剥がれてブルブルとノイズを発生させることがあります。このような弦は古

くなくても交換します。

弦はメーカーにより値段、音色、長さ、消耗の早さなどが多様です。なるべく楽器の特徴にあう弦を使いましょう。

自分でする調整

弦の張り替え

弦は1本ずつ交換します。同時に2本以上外さないようにしましょう。

1. 裸のガット弦は、張る前に片端に結び目(玉)を作ります。玉は、テールピースの穴の外で留まる大きさにします。

2. テールピースの穴に胴側から外へ弦を通し、もう一方は隣の弦と交差しないようにペグの穴に通し、穴の向こう側に少し出してペグを回します。最初の2~3回は弦が抜けないように回し、あとはペグのつまみ方向に向かって隙間がないようにきれいに巻きます。

弦を張るときには、糸倉の内側の際でちょうど巻き終わるようにします(図1)。糸倉の中を見てペグのつまみ側に弦が重なっていると(図2)硬くて回せなくなります。逆に巻き終わりが中央に寄りすぎると、ペグが弦の張力で押し出されるので止まらなくなります(図3)。

図1 良い例

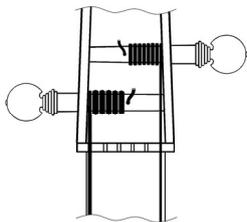


図2 悪い例

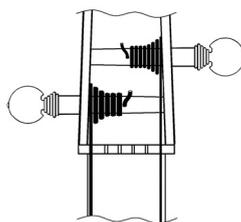
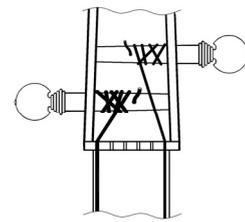


図3 悪い例



3. 弦のたるみがない程度に巻いたら、駒の溝に弦を載せます。弦と駒の擦れる音がするときには、駒や上駒のそれぞれの溝に4Bなどの濃い鉛筆を塗ると滑らかになって解消します。

4. 正しい音になるまで、弦を張ります。弦の伸びが収まるまでは音が下がるので、音の高さを確認しながらペグを回します。特に細い弦では最後の半音をゆっくり上げます。

さらに一言

- 予備の弦は、一揃いを常時ケースに入れておきます。
- 弦が切れたらどの部分で切れたかを調べて、何度も同じ箇所では切れる場合は、当たっている箇所に鉛筆を塗って滑りを良くしたり、角を取ります。
- 弦の張り替え後に音が安定するまでの目安は、バスの6弦でおよそ3週間、1弦で2~3日、トレブルは数時間です。一度に複数本張り替える場合、同時に安定させるためには太い弦を先に交換しておくのがコツです。
- 両端に近いほうで切れた弦は、十分に長さがあれば、音色は落ちますが再利用できます。
- 弦が長すぎるときには切っても良いです。

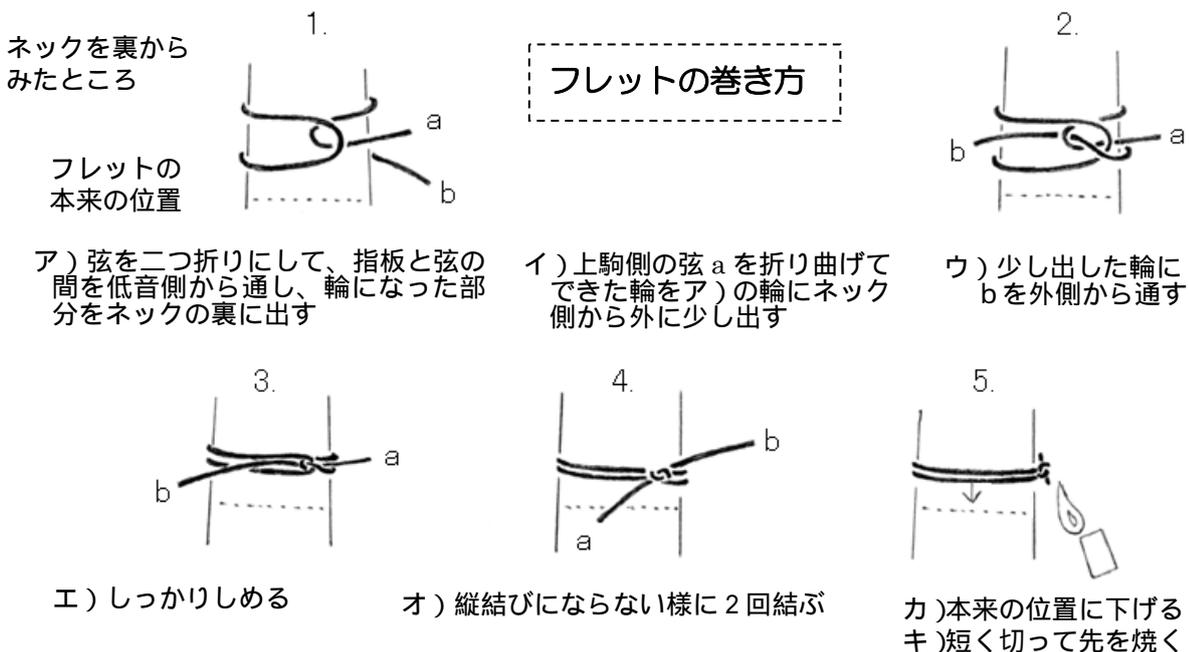
(ガット弦の種類については p.7 を参照)

フレットの巻き直し

フレットは、湿度の変化や弦の古さで音程が合わなくなったら動かして調整します。そうこうしてゆるんだり、空気の乾燥でフレットの弾力性が失われると、位置が定まらなくなるのでフレットを新しくします。また、弦に接する部分が摩滅したり、切れたときも替えます。

フレットに使うガット弦は販売もされていますが、普通は保管して置いた使い古しの1弦から3弦を利用します。各フレットの太さは、指板と弦までの距離によりますが、目安としては第1フレット～第2または第3フレットに3弦を、第3～5または6フレットに2弦を、第5または6～7フレットに1弦を使います。1フレットの弦が太くて巻きにくい場合には、事前に湿らせて巻くとしっかり締まります。

フレットの基本的な位置は、弦長（上駒側のきわから駒の厚みの半分まで）を計り、上駒から1/3の位置が7フレット、1/4が5フレット、1/9が2フレットです。



ゆるんだフレットと楽器の間に楊枝などを差し込むのは、応急処置に留めます。

専門家に任せる調整

弾き勝手や音がいつもと違うと感じたら、ここまで述べてきた点をチェックしてください。楽器に割れや剥がれが出たとき、駒の傾きや溝の深さが気になるとき、魂柱が倒れたり長すぎると感じたとき、また、弓の毛替えは専門家に任せましょう。ペグや弓のネジが上手く回らないときにも、専門家に見てもらいましょう。フレットの巻き直しを依頼することもできます。



自分で調整が出来るようになって、よい音が得られたと思っても、1～2年に一度くらいは専門家の調整を受けましょう。また、何か気になることがあるときは先送りせずに相談しましょう。万一、応急手当が必要な場合でも、決して合成接着剤を使ってはいけません。

これらにかかる費用や日数は、依頼時に専門家にお尋ねください。

第3章 レパートリーと文献

Repertoire and Treatises about the Viola da Gamba

ヴィオラ・ダ・ガンバの名曲と、その演奏法を知るための文献のリストです。
全貌をつかみたい初心者も演奏家もご活用ください。

Find selected sources of music and books,
organized according to countries, centuries, styles and degree of difficulty.



© Minoru Yokota

目次

西暦	1500年	1600年	1700年	1950~		
イタリア la viola da gamba le viole da gamba	I 多声楽曲・コンソート ● p. 21	II ディミヌツィオーネ (分割装飾) ● p. 22	III 舞曲・カンツォン ほか p. 22			
イギリス a viol viols	IV 多声楽曲・コンソート p. 23	V タブラチュア (文字譜) p. 24	VI ディヴィジョン (分割即興) ● p. 24	VII カンタータ・通奏低音ほか p. 24	XIV
フランス la viole les violes	VIII 多声楽曲・舞曲 p. 25	IX 二重奏・無伴奏 ● p. 25	X 通奏低音付独奏・室内楽 p. 25	現代 p. 28	
ドイツ die Gambe die Gamben	XI 多声楽曲・合奏 p. 26	XII 通奏低音付室内楽 p. 27	XIII 通奏低音付独奏ほか p. 27		

国名の下段は、各国の楽器名称で、下は複数形 各項目に ● 重要文献がある 目次と表の二重罫線は、ルネサンス・バロック・前古典派などの様式の境目

凡例 作曲家名・著者名欄の表記は、欧文は *The New Grove Dictionary of Music and Musician* (2001)を、和文は『ニューグロヴ世界音楽大事典』(1994-5)を基本とした。作品集名・作品名・曲名欄では原語を優先した。当時の版本はイタリック体にして出版地・出版年を示した。当時の版本がない場合はローマン体で曲名を記してあり、これには自筆譜や手写譜のファクシミリ、個人全集や叢書、現代譜を含んでいる。それらが混在している場合はジャンル名を記して*を付し、代表的な曲名を挙げたが、作曲地・作曲年は不詳が多い。作品番号がある場合には曲名・作曲年・作曲地を省いたものがある。現代譜の詳細については出版社の盛衰が激しいので略した。難易度は★が多いほど高い。歴史については pp. 8-11 を、譜の読み方や様式、ジャンル名等の用語については第 4 章を参照。

省略記号 a 数字: 声部数 Alt: アルト (声) B: バス・ガンバ bc: 通奏低音 Bs: バス (声) Cem あるいは Clv: チェンバロ cons: コンソート Cor: コルネット Fl: フラウト inst: 器楽 Lu: リュート Ly: リラ・ヴァイオリン orch: 管弦楽 Org: オルガン Rec: リコーダー Sop: ソプラノ (声) str: 弦楽器 Ten: テノール (声) Tr: トレブル Va: ヴィオラ Vdg: ガンバ Vle: ヴィオロオーネ Vn: ヴァイオリン Vo(s): 声 (複数) W: 管楽器

備考欄と叢書記号について

備考欄には、個人全集にガンバの曲が一曲でも収載されている場合には「個人全集にあり」とし、叢書類に収載されている場合には、その代表的な叢書名を記した。叢書名については p. 30 を参照。なお、以下に挙げる叢書名は、*The New Grove* (2001)の文献略語に依っている。

CEMF	Corpus of Early Music (in Facsimile) (Brussels, 1970-72)	HM	Hortus musicus
EDM	Das Erbe deutscher Musik	MB	Musica britannica
EM	The English Madrigal School, rev. as The English Madrigalists	PSFM	Publications [Société française de musicologie]

個人全集、叢書については p. 30 を、図書館については p. 35 を参照して下さい。なお、各図書館では諸規則を守り、複写に際しては著作権にも配慮して下さい。

イタリア

I イタリア 多声楽曲・コンソート・教本

多声楽曲とは、声楽由来のポリフォニー曲。マドリガーレ、シャンソンなどの世俗曲、モテットなどの宗教曲がある。

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
ペトルッチ編 Petrucci, Ottaviano (1466-1539)	<i>Harmonice musices odhecaton</i> , Venice, 1501	a3-4	ガンバが登場した時代のこの印刷譜には、アグリーコラ、イザーク、ジョスカン等のシャンソン、伊・羅・西・独語の作品を収録。	★~ ★★	叢書 にあり
アルカデルト Arcadelt, Jacques (1507-1568)	Madrigal*, O felice occhi miei , <i>Il primo libro di madrigali</i> , Venice, 1539	a4	半世紀以上にわたり、多くの作曲家がディミヌツィオーネなどの元歌として使ったマドリガーレ。他多数。	★	個人全集 にあり
ガナッシ Ganassi dal Fontego, Sylvestro di (Venice, 1492-mid.16C)	● <i>Regola rubertina</i> , Venice, 1542 ● <i>Letzione seconda</i> , Venice, 1543	独奏 及び 自己伴奏歌曲	単音や重音を用いた無伴奏リチェルカーレや、歌曲を歌いながら自分で伴奏する例が示されている。2巻本。	★~ ★★★★	和訳なし

貴族に献呈された網羅的な最古の教本。声楽曲をなぞることから離れ、初めて器楽曲として独立。以後の理論と演奏の基礎となった重要文献。第1巻：楽器の構え方、体の動き、質の高い演奏、指使い、運弓法、腕と手の使い方、良い音の出し方、調弦法の解説。音階の説明。第2巻：弦の良し悪し、フレットの巻き方と位置、文字譜の解説、弓使いの規則。ポジション移動と移弦、分割奏法のための指針、4弦、3弦になった場合の奏法。

その他の主なマドリガーレの作曲家：A. ヴィラールト、C.de ローレ、G.P. パレストリーナ、O.di ラッソ、L. ルツァスキ、L. マレンツィオ、C. ジェズアルド ほか。

II イタリア ディミヌツィオーネとバスタールダ

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
オルティス Ortiz, Diego (Toledo c1510-c1570)	● <i>Trattado de glosas</i> , Rome, 1553	無伴奏 Cem付独奏	第2巻に、無伴奏と、ラ・スパーニャ、マドリガーレ、シャンソン、バスダンスに基づくリチェルカーレが27曲ある。	★★～ ★★★	和訳あり 参考文献 参照
西洋音楽の特徴である時間の分割を、ヴィオラ・ダ・ガンバで装飾的に実践できるように例示した重要文献。このような、音価を分割して装飾的に演奏する作品をディミヌツィオーネという。2巻本。第1巻では、器楽及び声楽における分割の原則、40頁に及び分割装飾の例がある。第2巻では、それが各国の音楽に応用できることを示し、ガナッシより技巧的な器楽曲となっている。ガンバ奏者でなくとも即興的な装飾法を学ぶことのできる必須の一冊。					
ダラ・カーザ Dalla Casa, Girolamo (?-c1601)	<i>Il vero modo di diminuir</i> , <i>libri I et II</i> , Venice, 1584	B+a4伴奏	ディミヌツィオーネ技法を発展させたバスタールダ様式。第1巻は例題と音程別の装飾例、第2巻はシャンソン、マドリガーレにもとづく10曲と、全声部を装飾するcons曲1で構成される。	★★～ ★★★★	伴奏は cons
バッサーノ Giovanni Bassano (c.1550-1617)	<i>Motetti, madrigali</i> <i>et canzoni francese...diminuti</i> , Venice 1591	B+a4伴奏	バスタールダ様式。1585年には音程別の装飾例と1曲、本書にはマドリガーレにもとづく8曲を掲載。多声的な技法だけでなく、音型・リズム・模倣に変化を盛り込んだ作品。	★★～ ★★★	伴奏にBc. 的傾向
R.ロニョーニ Rognoni, Riccardo (c1550-b1620) F.ロニョーニ Rognoni, Francesco T. (c1570-a1626)	second part of <i>Passaggi per potersi</i> , Venice, 1592 <i>Selva de varii passaggi</i> <i>secondo l'uso, moderno</i> , Milan, 1620	B+a4伴奏 B+a5伴奏	技巧的なバスタールダ様式。第1巻に歌と楽器のための音程別の装飾例、第2巻に名曲〈別れのとき〉など4曲。息子のフランチェスコも〈野山も春の装い〉〈ある日スザンナは〉等3曲。	★★～ ★★★★	伴奏につ いて表記 なし
ポニッツィ Bonizzi, Vincenzo da (?-1630)	<i>Alcune opere di diversi</i> <i>auttori</i> , Venice, 1626	B+a4～5伴奏	超絶技巧のバスタールダ様式のB9曲が収められている。最低音がG'やA'なのでG'CFAdg調弦と推測される。伴奏は通奏低音で書かれているが、序文には4～5声体が好ましいとある。	★★★★～ ★★★★★	6弦Bで4° 又は5°上 に移調して 演奏可

その他の主なバスタールダ様式の作曲家：O. バッサーニ、A. ヴィルジリアーノ、V. ポニッツィ、B. セルマ ほか。

III イタリア：舞曲、オペラ、カンツォン、コンチェルト

カンツォンとは、「タンタターン」の同音反復のリズムをテーマにもち、それで始まる曲のこと。

ガストルディ Gastoldi, Giovanni G. (c1554-1609)	<i>Balletti</i> , Venice 1591	a5	「弾いても歌っても踊ってもよし」と副題にある和声的な明るい5声の曲集。〈愛の勝利〉が有名。他二重奏曲もある。	★	叢書 CEMF他
G.ガブリエーリ Gabrieli, Giovanni (c1554/7-1612)	<i>Sacrae symphoniae</i> , Venice, 1597 <i>Canzoni per sonare</i> , Venice, 1608 <i>Canzoni e sonate</i> , Venice, 1615	a8～15+Org a4～8, a5～22+Org	サン・マルコ寺院内の左右の高廊に演奏者を分けて配置し、ステレオ効果を挙げる複合奏の曲。壮麗な響きの効果は後世に引継がれた。左記曲集には有名なカンツォンを収録。	★★～ ★★★	個人全集 にあり
モンテヴェルディ Monteverdi, Claudio (1567-1643)	<i>L'Orfeo</i> , Venice, 1609	Vos+orch	編成表に3Bとガンバの指示がある初のオペラ。黄泉の国のシンフォニアに1Contra B.de.Vdg、精霊の合唱に2B。	★	個人全集 にあり

カステッロ Castello, Dario (fl.1st half of 17C)	Sonate concertate <i>in stil moderno per sonar</i> , Venice 1621 & 1629	1~2(Reed/Cor)+1~2B+bc a4+bc	全2巻中にVioletaと指示のある曲14。第2巻の15.16番は「弓奏弦楽器で」とconsを指定。初期バロック様式の器楽曲。	★★★	VioletaがVnかVdgか不明
フレスコバルディ Frescobaldi, Girolamo A. (1583-1643)	Canzoni da sonare , Venice, 1634	1~2B+bc 1~2(Reed/Cor)+1~2B+bc a4+bc	速度、拍子、強弱の指示により変化に富んだ構成をとる。曲集内の編成別に上から独奏・二重奏7曲、合奏19曲、cons6曲。	★★★~ ★★★★	個人全集にあり
タルティーニ Tartini, Giuseppe (1692-1770)	Concerto per Viola da gamba, in D-Dur	B+str+ Horns+bc	ホルン2本を含む18世紀前古典派のコンチェルト。急緩急の3楽章でカデンツァも残っている。イ長調やソナタ2曲もある。	★★★★★	

その他の主な作曲家・作品：G. カッチーニ、S. ディンディア（歌曲の通奏低音）、G. レグレンツィ(4声のソナタ)、前古典派でB. ガルツピ（ソナタ）ほか。

イギリス

IV イギリス：多声楽曲・コンソート

ファンタジアは対位法的な曲。イン・ノミネ(他にブラウニングなど)は、この名のつく旋律を定旋律にして作られる曲。

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
バード Byrd, William (1540-1623)	Fantasias and In Nomines London	a3~6	イギリス風のファンタジア、コンソート・ソング、舞曲を書いた。イン・ノミネが広まる切っ掛けを作った。	★~★★	個人全集にあり
モーリー Morley, Thomas (1557/8-1602)	Canzonets , London, 1593~1601	a2~7	カンツォネットをタイトルに含む4冊の曲集をはじめ、マドリガルやバレット集5冊も、consの基礎となる重要レパートリー。歌詞の有無に関わらず旋律も和音も美しい。	★~ ★★	叢書 EM他
ルーボ Lupo, Thomas (bap1571-?1627)	Fantasias, Pavans , London	a3~6	ミラノから移住した作曲家一家の出。モチーフや速いパッセージも取り入れ、イタリア風に明解な構造と明るい響き。	★★~ ★★★	叢書 MB, HM
ダウランド Dowland, John (?1563-1626)	Lachrimae or Seaven Teares , London, 1604	a5	〈涙のパヴァーヌ〉は consの代名詞的な名曲。《ラクリメまたは7つの涙》の第1曲目でイギリス的な暗い響き。舞曲が続く。	★★~ ★★★	
ギボンズ Gibbons, Orland (bap1583-1625)	Consort song*, The Cryes of London , London, as early as 1610.	a5+Vos a2~6	〈ロンドンの物売りの声〉はイン・ノミネを含む名曲。他に歌と器楽の宗教曲ヴァース・アンセムやcons曲40余がある。	★★~ ★★★	叢書 MB他
ジェンキンス Jenkins, John (1592-1678)	Fantasias, Pavans, Airs	a3~6	典型的なconsのレパートリー144曲。ファンタジア組曲56曲、ディヴィジョン29曲、エア483曲、Ly入り369曲。	★★~ ★★★	叢書 MB他

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
パーセル Purcell, Henry (1659-1695)	Fantasias and In Nomines , London, 1680, Z732~743, Z745~747	a3~7	イギリス最後のルネサンス様式の多声楽曲。全15曲。精緻な作品は他の追隨を許さない名曲。イン・ノミネ声部は平易。	★~ ★★★	個人全集 にあり

その他の主なcons曲の作曲家：J. タヴァーナー、Chr. タイ、A. フェッラボスコ I, II、A. ホルボーン、J. コプラリオ、J. ウォード、W. ローズ、M. ロック ほか。

V イギリス：タブラチュア（文字譜）

文字譜とその読み方については、Vol.4を参照。

ヒューム Hume, Tobias (1579-1645)	<i>The First Part of Ayres</i> , London 1605 <i>Captaine Humes Poeticall Musicke</i> , London, 1607	1~3Ly+Vo 1~2Ly+1~3B+Vo	Ly以外のどのガンバでも演奏可。前者は各頁上部に「音楽のユーモア」とある小品集。和音を駆使した独奏曲が主で、兵士絡みの曲が有名。後者はVo入りの3曲を含めた合奏曲23。	★★~ ★★★	前者:五線譜 の曲を含む 後者:他の調 弦法あり
----------------------------------	---	---------------------------	--	------------	-----------------------------------

その他の主な作曲家・作品集：W. コーキン、Th. フォード、マンチェスター・ヴィオラ・ダ・ガンバ・ブック ほか。

VI イギリス：ディヴィジョン（分割即興）

p.22のIIイタリアのイギリス版。即興を目差すために、低音旋律(グラウンド)や音型の扱い方に特徴がある。

シンプソン Simpson, Christopher (c1602-1669)	● <i>The Division-viol</i> , rev 2nd ed. (London, 1665)	B+B/Cem/Org/Lu	この本の他にエア87、リトルconsセット4、ファンタジア12、ディヴィジョン約32、ファンタジア組曲4、Ly14曲他。	★★★★~ ★★★★	和訳あり 参考文献 参照
--	--	----------------	--	---------------	--------------------

ディヴィジョン奏法の譜例付理論書。グラウンドと呼ばれる低音定旋律に基づく、技巧的に高度な即興演奏。第1部：最適な楽器、弓、構え方、弓の持ち方と運弓法、左手の構え、調弦と音階、右腕と手首の動き、重音の弾き方、装飾。第2部：音程、協和音と不協和音、3~5声部の作曲の仕方、天体の視座の類推図。第3部：3種のディヴィジョンの方法について具体例を示している。巻末の例題であるプレリュード3曲、ディヴィジョン8曲はよく演奏される。

その他の主なディヴィジョンの作曲家：J. ジェンキンス、Th. シュテフキンス、H. バトラー ほか。

VII イギリス：カンタータ・通奏低音ほか

カンタータは声と楽器による室内楽曲のこと。教会カンタータと世俗カンタータがある。

ヘンデル Handel, Georg Frideric (1685-1759)	La Resurrezione , Rome, 1708, HWV47 Tra le fiamme , Rome, 1707/08 (by H. Zenck), HWV170	Vos+Ws+str+B+bc Sop+2Rec+2Vn+B+bc	前者はオラトリオで、独立した声部を持ち、ガンバは内声と通奏低音の役割。後者は世俗カンタータで、レチタティーヴォとアリア各3曲から成る。この他、ヴィオラから転用したソナタや偽作も有名。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり
--	--	--------------------------------------	---	-------------	-------------

フランス

VIII フランス・フランドル：多声楽曲・舞曲

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
イザーク Isaac, Henricus (c1450/55-1517)	Weltliche Werke*, Isbruck, ich muss dich lassen , 1583	a3~4	世俗の表題がついた器楽曲を含めて100曲余り。〈インスブルックよさらば〉が有名。	★~ ★★★★	個人全集 にあり
サンドラン Sandrin, R.Pierre (c1490-a1560)	Chanson*, Douce memoire	a4	有名なく甘き思い出は、後にこの曲をもとにした50曲にも及び曲が書かれた。他に50曲のシャンソン等がある。	★	個人全集 にあり
スザート編 Susato, Tylman (c1510/15-1570 or.later)	Het I [II] musyck boecken alderhande danserye , Antwerp, 1551	a4	ロンド、アルマンド、パヴァン、ガリアルドなどの57曲の平易な舞曲集。〈千々の悲しみ〉〈戦い〉などが有名。	★~ ★★	叢書 CEMF他
シャルパンティエ Charpentier, M.-A.(1643-1704)	Messe de minuit pour Noël , St. Louis, 1692	a4~6+2Fl+ str+bc	このクリスマスのための〈真夜中のミサ〉などにガンバの使用がある。他、1曲の〈コンセール a4〉はバロック様式の組曲。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり

その他の主な多声楽曲と舞曲の作曲家：Cl.de セルミジ、P. アテナン、Cl. ル・ジュヌヌ、Cl. ジェルヴェーズ、E. デュ・コロワ ほか。

IX フランス：二重奏・無伴奏

バロック時代の組曲は、前奏曲に始まる一組の舞曲をさし、アルマンド、サラバンド、メヌエットなどがある。

サント・コロンブ Sainte-Colombe, Jean de (fl.1658- by1701)	Concerts a deux violes esgales, Paris	2B	全67曲に表題があり、仏バロックのガンバの語法と装飾が確立。〈トンボー悔恨〉が名曲で映画に。他にB舞曲集あり。	★★★★~ ★★★★★	叢書 PSFM
ド・マシ De Machy, Sieur (fl. 2d half of 17C)	Pièces de Violle en musique et en tablature , Paris, 1685	B	組曲が、五線譜と文字譜で各4曲。リュートの特徴である和音を多用したため、左腕の構えがルソーと論争になる。	★★★★~ ★★★★★	
ルソー Rousseau, Jean (1644-1699)	● Traité de la viole Paris, 1687	--	Bに第7弦と銀巻線を導入したサント・コロンブに献呈。起源の項でマシの旋律的な美しい演奏について述べている。	演奏用の 曲例無し	和訳あり 参考文献 参照

ルイ14世治下のヴェルサイユ宮殿における音楽の理解に不可欠の重要文献。ガンバの起源と歴史。第1部：構え方、手の形、弓の持ち方と動かし方、調弦、弦と弓について、指板図の説明。第2部：5つの奏法とその特徴、良い趣味について。自然で人の声に近い旋律奏法を良しとする著者と、和声奏法を主張するド・マシとの論争を繰り広げる。伴奏法。第3部：フランス特有のポール・ド・ヴォワなどの装飾音の演奏法。第4部：調の読み替え。

X フランス：通奏低音付独奏・室内楽ほか

通奏低音伴奏にガンバを加える例は枚挙にいとまがなく、独立したガンバの声部が書かれることも多い。

M.マレ Marais, Marin (bap1656-1728)	Pièces de violes , Livres I-V, Paris, 1686 (bc part in 1689), 1701, 1711, 1717, 1725 Pièces en trio , Paris, 1692 La Gamme , Paris, 1723	B1~3+bc 2(Fl/Vn/Tr)+bc Vn+B+bc	全5巻組曲37に593曲、表題のある名曲、リュリやサント・コロンブを追悼するトンボー、〈フォリア〉〈人の声〉〈膀胱結石手術の図〉〈アラバスク〉〈夢見る女〉など。トリオ・ソナタにはTrの指定。《音階》では〈鐘〉が有名。マレ抜きにガンバは語れない。	★★~ ★★★★★	個人全集 にあり
F.クーブラン Couperin, François (1668-1733)	La Sultane , Paris, c1695 Les goûts-réunis , Paris, 1724 Pièces de violes , Paris, 1728	2Vn+B+bc 2B+(bc) B+bc	〈スルタン妃〉仏風序曲と変化に富んだ多部分が続く四重奏。《趣味の融合》仏・伊様式の融合。2Bが語り合う、王の寝室音楽。《ヴィオール曲集》仏・伊様式の2曲。弾き易くないが名曲中の名曲。	★★~ ★★★★★	個人全集 にあり

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
A. & J.B.* フォルクレ Forqueray, Antoine (1672-1745)	<i>Pièces de violes</i> , Paris, 1747	B+bc	Vnのイタリアの表現を標榜した組曲5。悪魔的といわれる超絶技巧の曲。表題には人名が多く〈ジュピター〉が有名。	★★★★~ ★★★★★	* Jean-B. (1699-1782)
ラモー Rameau, Jean-Philippe (bap1683-1764)	<i>Orphée ; Les amants</i> , Paris, 1721 <i>L'impatience</i> , Paris, c1715-1722 <i>Pieces de Clav. en concerts</i> . Paris. 1741	Vo(s)(+Vn)+B+bc Sop+B+bc Cem+Vn/Fl+B+bc	〈オルフェ〉は通奏低音の装飾、〈裏切った恋人たち〉は連続和音、〈焦燥〉は独立した技巧的オブリガートと、Bに特徴があるカンタータ。《Clv コンセール》はCemとの合奏曲5。必携作品。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり

その他の主な通奏低音付独奏、室内楽、声楽のオブリガート曲の作曲家：M-R.de ラランド、A.カンブラ、L.de ケ・デルヴロワ、J.B.de ボワモルティエ、J-M. ルクレール ほか。

ドゥシュ、バル・ドゥシュの通奏低音付独奏、二重奏の作曲家：Th.マルク、Ch.H.de ブランヴィーユ、Ch.ドレ、J.バリエール、L.& B. de ケ・デルヴロワ、N.G.ランドルミ ほか。

ドイツ

XI ドイツ：多声楽曲・合奏

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
ゼンフル Senfl, Ludwig (c1486-c1543)	Deutsche Lieder*, Tandernaken , 1534 Carmen*, Ich stueud an einem Morgen , 1538	a4~6 a3~4	独語のほか伊語・仏語・羅語の和声的な世俗歌曲や、宗教改革期の対位法的な曲の妙味が味わえる。〈タンデルナーケン〉〈ある朝私は〉などが知られている。	★~ ★★★	個人全集 にあり
プレトーリウス Praetorius, Michael (1571-1621)	<i>Musae Sioniae I~IX</i> , Regensburg 1605~Helmstedt, 1610 <i>Terpsichore</i> , Wolfenbüttel, 1612 <i>Urania</i> , Wolfenbüttel, 1613	Vos+Vdgs+bc a4~6 Vos+instr+bc	プロテスタント音楽の精華。教会暦にしたがって歌や楽器による合奏曲が9冊。舞踏の女神をタイトルに持つ舞曲集には、ブランル、パッサメッツォなど平易な312曲を収録。複合奏で掛け合う大編成の宗教曲は少人数でも対処可。	★~ ★★	個人全集 にあり
ブレイド Brade, William (1560-1630)	<i>Newe ausserlesene Paduanen</i> , Hambrug, 1609	a5~6	イギリスから移住。パヴァーヌ、ガリアルド、カンツォン、アルマンド、イントラーダ等のcons曲集6冊をドイツで出版。	★~ ★★★★	叢書 MB
シュッツ Schütz, Heinrich (bap1585-1672)	<i>Die Auferstehung</i> , 1623, SWV 50 <i>Die Sieben Worte</i> , 1657, SWV 478 <i>Historia der Geburts</i> , 1664, SWV 435	Vos+5Vdg+bc Vos+5Vdg+bc Vos+2Vdg+bc	左記の名曲〈復活の物語〉〈十字架上の7つの言葉〉〈降誕物語〉やSWV 272、273、451、452にもガンバが指定されている。その他、声の代理や重複、bcにも用いられる。歌詞無しでもフレーズがわかるようになる最上素材。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり
シャイン Schein, Johann Hermann (1586-1630)	<i>Banchetto Musicale</i> , Leipzig, 1617 <i>Cantional</i> , Leipzig, 1627, enlarged 1645	a4~5 a4~6(7)	前者は20の舞曲セットで、パドゥアナ、ガリアルダ、コレンテ、アルマンド等で構成。ルネサンス様式最後の舞曲。後者は平易なコラール313曲で、低音に数字があり小節線が無い。	★~ ★★	個人全集 にあり

シャイト Scheidt, Samuel (bap1587-1654)	<i>Paduana, Canzonetto</i> , Hamburg, 1621 <i>Concertuum Sacrorum</i> , Hamb., 1622 <i>Geistliche Concerten</i> , Halle, 1631, 1634	a4~5+bc	シャイトと同様の舞曲の他、ベルガマスク、パッサメッツォなど。カンツォンでは、〈隣国のローランド〉が有名。《教会合奏曲》4曲、《霊的合奏曲》2曲にガンバ1~5本の指示あり。	★~ ★★★	個人全集 にあり
--	---	---------	---	-----------	-------------

その他の主なコラルの作曲家：J. ヴァルター、H.L. ハスラー ほか。

XII ドイツ：通奏低音付室内楽

ブクステフーデ Buxtehude, Dietrich (c1637-1707)	Kantaten*, Membra Jesu nostri , BuxWV 75, and 5, 6, 32, 64, 68, 69, 97, 115 Sonate à doi, Violino & Violadagamba con Cembalo , Lübeck, 1694, 1696, BuxWV252-273	Vo(s)+1~5Vdg+bc (1~2Vn)+B+(Vle)+ bc	世俗1も含めてカンタータ9曲、〈主をたたえよ〉〈十字架上のイエスの四肢〉が有名。ソナタにはVnとBの19曲、Vleとの1曲、独奏1曲があり、17世紀後半ドイツに特有な多部分の構成。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり
キューネル Kühnel, August (1645-c1700)	14 Sonate ô partite , Kassel, 1698	1~2B+bc	2Bの6曲、Bの8曲のソナタ。典型的なドイツ混合様式で、フランス風舞曲、イギリス風ディヴィジョン、重厚な和音などを多部分に配して構成している。	★★★★~ ★★★★	
シェンク Schenck, Johannes (bap1660- a1710)	Scherzi musicali , Amsterdam, [1698] Le Nymphe de Rheno , Am, [1702] L'echo du Danube , Am, [1704]	B+bc 2B B, B+bc	ドイツ混合様式の舞曲名を冠した器楽曲で、左記曲集の上から14組曲に101曲。二重奏12組曲。2曲の無伴奏ソナタを含めて6曲は、独自の作風。他にも、手稿や出版がある。	★★~ ★★★★★	叢書 EDM

その他の主なヴァイオリンとのコンソート、トリオ・ソナタの作曲家：F. トウンダー、J. ローゼンミュラー、J.H. シュメルツァー、J.A. ラインケン、H.I.F. von ビーバー ほか。

XIII ドイツ：通奏低音付独奏ほか

テレマン Telemann, Georg Philipp (1681- 1767)	Der Getreue mus. -Meist , Hamburg, 1728-9 Quadri , Ham, 1730, Nouveaux , Paris, 1738 Fantasies Basse... , Hamburg, 1735 Essercizii musici , Hamburg, 1739-40 Du aber, Daniel , Trauerkantate	B, 2B, B+bc Vn/Fl+B+bc B Rec/Fl+B+bc Vos+Chor+W+Vn+2B+bc	左記の出版譜やダルムシュタットのヘッセ国立図書館蔵の手稿譜に、無伴奏13曲、二重奏2曲、Bの通奏低音付独奏4曲、Trの通奏低音付独奏1曲、トリオ・ソナタ10曲、四重奏曲16曲、葬送カンタータ1曲がある。他に弦楽合奏との序曲1曲、組曲1曲、協奏曲3曲もある。さまざまな楽器編成があって多作。	★★~ ★★★★★	個人全集 にあり
J.S.バッハ Bach, Johann Sebastian (1685- 1750)	Kantaten* , BWV106. 152. 76. 199. 198. 205 Gambensonaten* , BWV1027~1029 Brandenburgisches Konzert, BWV1051 Passionen* , BWV244, 245	Vos+2Rec+2B+bc 他 B+oblig. Cem 2Va+2B+bc Alt/Ten/Bs+B+orch	教会カンタータ4曲と世俗1曲、ガンバ・ソナタ3曲、ブランデンブルク協奏曲6番、マタイ・ヨハネ受難曲のアリアには技巧的なBのオブリガートが使われており、不朽の名作。これらの曲が演奏されるかぎり、ガンバが存在する意義は失われない。	★★★★~ ★★★★★	個人全集 にあり
グラウン Graun, Johann Gottlieb (1702- 1771)	Sonaten , in B, F, Trios , in F, C Trios Concertante , in D, G Concerto , in A, A, a, C, D, F, G	B+oblig. Cem(+bc) 2B+bc B+str+bc	前古典派のベルリン楽派に特有な多感様式。和音を多用したドイツの重厚な響きと器乐的な語法が多い。カデンツァなどをつける作品。コンチェルトは7曲の他、VnとB1曲がある。	★★★★~ ★★★★★	

作曲家名・著者名	作品集名・作品名・曲名	編成	作品の詳細・曲の特徴・ガンバの使われ方・左欄以外の作品	難易度	備考
シャフラート Schaffrath, Christoph (1709-1763)	Solo per il Viola de gamba, in B Sonaten , in G, A Duetto , in d	B+bc B+oblig.Cem 2B	ベルリン楽派の多感様式。通奏低音付ソナタは緩急緩、オブリガートチェンバロ付ソナタと二重奏は急緩急の3楽章構成。いずれも緩徐楽章はカンタービレが特徴。	★★~ ★★★★	
C.Ph.E.バッハ Bach, Carl Ph.E. (1714-1788)	Sonaten , in C, Berlin, 1745, Wq136, in D, Berlin, 1746, Wq137	B+bc	多感様式の典型的な3楽章形式のソナタ。伴奏は通奏低音でカデンツァは残っていない。二長調は名曲。	★★★~ ★★★★★	個人全集 にあり
アーベル Abel, Carl Friedrich (1723-1787)	Sonaten , Duette	B+bc 1~2B	多感様式で3楽章形式のソナタと小品。技巧の難易を問わず名曲がある。種類は無伴奏、2B、通奏低音付Bがあり、全集の75曲の他、新たに40曲が見つかっている。	★★~ ★★★★	個人全集 にあり

その他の主な作曲家・作品：E.Chr. & L.Chr. ヘッセ (二重奏曲)、J.A. ハッセ (オペラからの抜粋室内楽)、F. ベンダ、J.Chr. バッハ (ベルリン楽派) ほか。

タンドゥン

XIV 現代 M. カーゲル、R. ケルターボーン、M. タレ、譚盾、D. ロープ、一柳慧、有馬礼子、西村朗、廣瀬量平、林光、水野勉などの名曲も生まれている。

その他の主な作曲家・作品：米国ヴィオラ・ダ・ガンバ協会のNew Music Catalogに最新のリストがある。 https://vdgsa.org/pgs/nm/catalog_intro.html (2018.1.03確認)

参考文献

ディエゴ・オルティス著 平尾雅子訳『変奏論』アルテスパブリッシング, 2010.

クリストファー・シンプソン著 佐藤一也・塚本孝訳『ディヴィジョン・ヴァイオル』 *Discordia Consorts: Journal of the Viola da Gamba Society of Japan*. 第一部: Vol.3, pp.4-17(1996), 第二部: Vol. 4, pp.4-13(2002), 第三部: Vol. 4, pp.14-29(2002)

Christopher Simpson 著 千葉潤之介 [ほか] 訳「ディヴィジョン ヴァイオル」[広島大学大学院教育学研究科] 音楽文化教育学研究紀要, 第1部: [通号] 20, pp.205-214 (2008), 第2部: [通号] 21, pp.201-209 (2009) 第3部: [通号] 22/23, pp.195-213 (2010/2011), [通号] 24, pp.213-216 (2012) 献辞・推薦文: [通号] 25, pp.227-230 (2013)

ジャン・ルソー著 関根敏子・神戸愉樹美共訳『ヴァイオル概論』アカデミア・ミュージック, 1988.

神戸愉樹美「ヴィオラ・ダ・ガンバ一次文献リスト: 国立音楽大学附属図書館の所蔵調査より」第2版, 2015
<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/guidance/files/gambalist20151031.pdf>

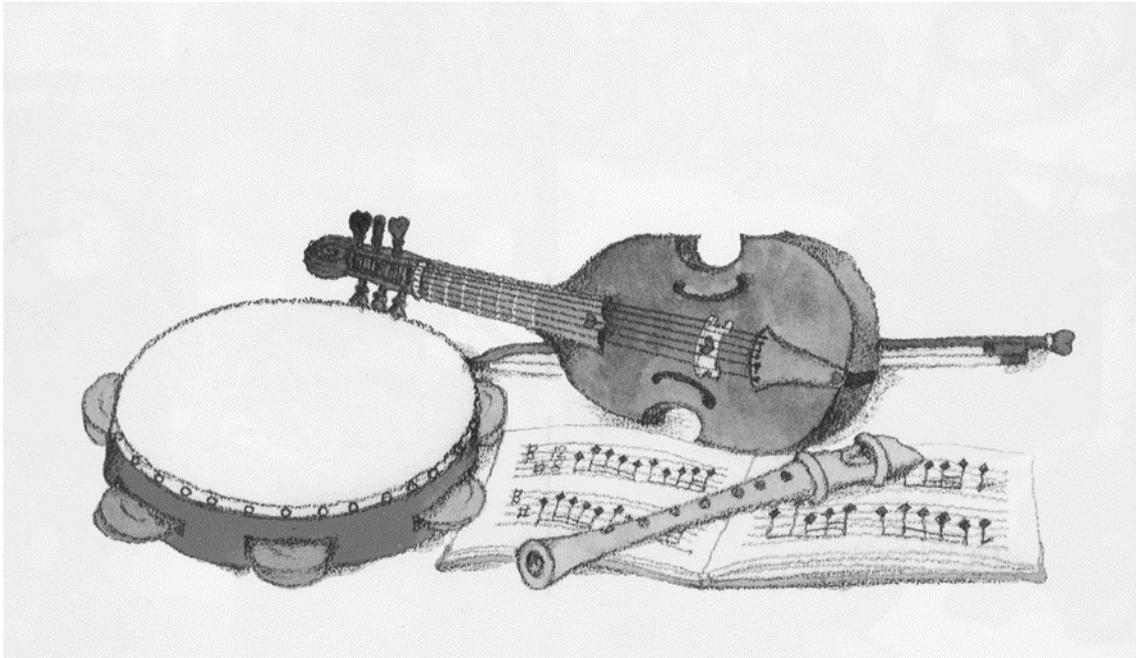
The New Grove Dictionary of Music and Musicians. - 2nd ed. New York: Grove, 2001. as Grove Music Online in Oxford Music Online.
<http://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic> (要有料登録)

『ニューグローヴ世界音楽大事典』(講談社 1994-5)

なお、項目の選択には、パーゼル・スコラ・カントールムのハンネローレ・ミュラー教授による 1970 年代の専攻生用カリキュラムを参考にした。

第4章 楽譜の読み方

Reading Viola da Gamba Music



© Minoru Yokota

16-18世紀イタリア、イギリス、フランス、ドイツの作品を演奏するための
楽譜の知識と実践への手引

A guide to play viola da gamba music from Italy, England, France and Germany
written between the sixteenth and the eighteenth centuries.

ヴィオラ・ダ・ガンバの音楽は、さまざまな種類の楽譜で記されていました。現代譜という国際標準ルールが確立する前の時代の音楽だったからです。現在は、そうした楽譜を五線譜に書き起こしたものも多く販売され、インターネット経由で容易に入手・閲覧できるようになりました。しかし、作曲家の意図を直に感じて演奏するには、可能な限り原典(オリジナル)、または、それに近い楽譜をよく観て読む作業が必須です。

さて、原典を読むとは言っても、作曲当時の人々には当然であった言語の抑揚、様式、美意識、演奏習慣などの多くは楽譜には書かれていません。とはいえ、録音のなかった時代の音楽ゆえに、楽譜こそが最大の情報源なのです。この章では、ガンバの楽譜の読み方の基礎だけでなく、広く楽譜以外からも知識と経験を体得する糸口をまとめました。

●楽譜の種類

自筆譜：作曲家自身が残した ^{マニユスクリプト}手稿譜です。筆の勢いや、作曲家が作品を書き留めた瞬間に居合わせるような感覚を感じられますが、ときには読みにくいこともあります。



J.S. Bach: Sonata BWV1027-I (1 番 1 楽章) ガンバパート譜 Walhall EW888

手写譜：同時代、または後世に自筆譜などを書き写した手稿譜です。コピーともいい、手写した人をコピイストと呼びます。下の譜例では、コピイストはペンツェル C.F.Penzel です。



J.S. Bach: Sonata BWV1029-I (3 番 1 楽章) ガンバパート譜 出典同上

当時の出版譜：活字木版 主に 16-17 世紀に用いられました。

【この音部記号の名は?】
詳しくは p.31 に説明



【この休符は何拍?】詳しくは p. 31

【クストゥス】詳しくは p. 32

P. Sandrin: "O felici occhi miei" from Diego Ortiz, *Trattado de Glosas ...*, (Roma, 1543)

腐食銅版 木版より繊細な表現が可能で、17-18 世紀フランスで用いられました。



【装飾記号などの弾き方は?】詳しくは p. 35

M. Marais, *II^{ème} Pièces de violes*, Paris 1701, p.111

ファクシミリ版：手稿譜や当時の出版譜を現代に写真製版したものです。インターネットからダウンロードできるものも増えています。

個人全集：作曲家の現存する作品を整理して学術的に研究した、信用のおける出版物とされています。曲名や作曲年代についての諸説を紹介していることもあります。ただし、実用には原典を参照して総合的な判断が必要となる場合があります。例えば、同じ音型にもかかわらずスラーの長さや弓使いの表記が異なっていたりするからです。作品番号のある作曲家もあり、バッハは BWV、パーセルは Z、ヘンデルは HWV などです。

叢書：国や地域別、ジャンル別等のシリーズで、楽譜を探す上で拠り所となる版です。日本各地の音楽関連図書館(詳しくは p.35)でも閲覧ができる場合が多いようです。有名な叢書には、Musica Britannica (MB)、Denkmäler deutscher Tonkunst (DDT)、Denkmäler der Tonkunst in Österreich (DTÖ)、Corpus mensurabilis musicae (CMM)、Le Pupitre、Nagel Archive などがあります。楽譜の始

特に、音域が広く跳躍音程が多いディヴィジョン音楽では、下記のように音部記号を頻繁に変えます。各種音部記号はスムーズに読めるように慣れましょう。



Ch. Simpson, *Division Viol* 1665, 巻末譜例 p.55.

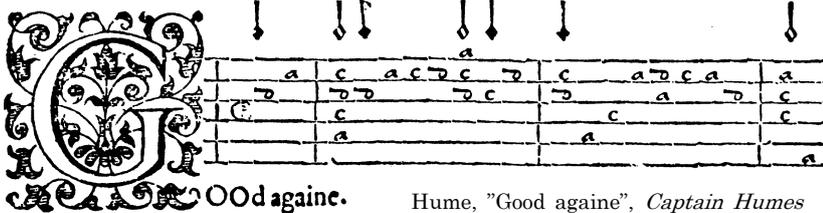
臨時記号：音符の左に記載されている臨時記号は、一回限り有効です。シャープ ♯(＃)の解除には♭を使いました。17世紀末には、♮は元の調の音に戻る記号でした。調子記号に♯があっても音符にも♯があれば、ダブルシャープ♯♯です。旋法の音楽では、規則上は臨時記号がつく音であっても、前後の響きに呼応させました。つまり、一つの正しい解があるのではなく、演奏速度次第で不協和音が禁則にならないように演奏者が判断したのです。また、書かれていなくとも当然補うべき臨時記号もあり、時代様式を知って経験を積む必要があります。

その他：◡ が小節線や五線の上にあると曲の終止を表しました。フランス舞曲では、繰り返しの1番括弧、2番括弧の開始位置を ☺ や ☺ の記号で示したり、繰り返すフレーズを毎回書かずに $\text{♩} \text{♩} \text{♩}$ で開始点を示すことがあります。また、^{フティット・ルブリース}後奏が付く習慣があります。┌^{トゥニユ}は保指 (p.34 表参照)で、^{かぎ}鉤で示されたところまで左指を指板から離さない印です。これは、リュートが多声的な効果を上げるために使う指使いに由来しています。

p. 30 活字木版の【クストゥス】は、次段の最初の音高を予告する記号です。

●文字譜(タブラチュア)

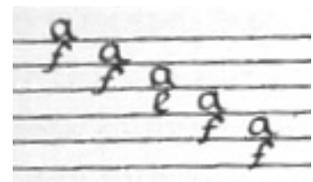
文字譜は、音符の代わりに文字や数字を使って書かれた奏法譜です。各弦を表す横線の上に、押さえるべきフレットを文字や数字で記します。16世紀のイタリアでは、一番下の線が最上弦(第1弦)を表し、開放弦をO、第1フレットを1、第2フレットを2と記し、音符の長さは各数字の上か下に符尾を書いて示しました。



一方、譜例のように、17世紀のイギリスでは、一番上が最上弦で、フレットは開放弦を a、

第1フレットを b などと、アルファベットで記しました。指番号の指定はありません。最上弦を表す線の上にある音符が音の長さを示していて、次の音符が記されるまでは同じです。

このような文字譜で書かれた多声楽曲の奏法をリラ奏法 Lyra-way と呼び、調弦は60種近くありました。文字譜は、どの調弦法でも、和音があっても弾きやすいのですが、調弦を明記する必要がありました。右図の例では、第1弦の開放弦(a)と、第2弦の第5フレット(f)を同じ高さの音にします。例えば、第1弦の開放弦がソのときには、第2弦の第5フレットを同じ高さのソにします。すると、第2弦の開放弦は4度下のレになります。これは通常の4・4・3・4・4度の調弦で、上記の譜例ヒューム“Good againe”が弾けます。



フレットを示す文字で調弦を表示

* 文字譜(タブラチュア)については、研究誌『Discordia Concors』Vol.5にあります。(本書 p.3 参照)

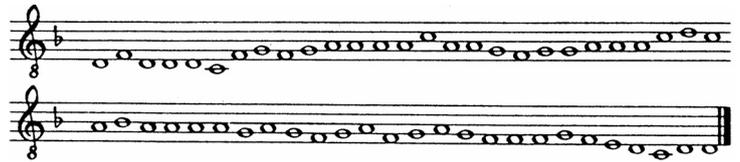
●ガンバ音楽の種類

ヴィオラ・ダ・ガンバの音楽は、人の歌声をガンバの音色で模倣することからはじまりました。16世紀の文芸活動の根底に人間美の再発見^{ルネサンス}という共通テーマがあり、人間の声こそが理想の音だとする考えが、イタリアを起点としてヨーロッパ各地に広がっていたからです。この時期に数多く生み出された声楽曲をガンバ合奏で演奏する際には、歌詞の抑揚やフレーズ、声楽の演奏を手本として参考にしましょう。

複数の声でできることには「追いかけること」と、「同時に声を出すこと」があります。つまり、多声楽曲^{ポリフォニー}と和声的な曲^{ホモフォニー}です。これらの書法が巧みに組み合わせられたマドリガーレやファンタジアは西洋音楽の粋で、書法を分析して作品を読むと演奏に役立ちます。

多声楽曲は、各声部を対等に扱って、旋律の絡みと和音の調和を重視する音楽です。古典派やロマン派の、主旋律と和音による音楽とは様式が異なります。多声楽曲は構造物を作るように作曲されているので、その柱となる拍を共有して演奏することが要です。楽譜からフレーズの区切りを見つけるには、テーマや他のパートの休符の後の音型を参考にして、自分のパートでその類似を見つけ出します。

ルネサンス時代には、多くの曲がテノール声部に定旋律を置いて、それを基準として作曲されました。定旋律は動きが少なくて易しいので、初心者が



イン・ノミネの旋律 'In Nomine' from *The New Grove*, 1980

コンソートの仲間に入るには、今も昔もこの声部から弾きはじめるのが最適のようです。イギリスで大流行したイン・ノミネ(上の譜例)やブラウニングもそのひとつです。多声楽曲には、この他にマドリガーレ、モテット、カンツォン等があり、バロック時代の作品にも、教会ソナタの速い楽章やフーガなどにこの造りがあります。

和声的な曲は、同時に鳴る和音の進行を重視する音楽です。言葉が同時に歌われるコーラル(讃美歌)と、リズムが揃うことで体の動きが揃うための舞曲がその代表です。これらには、協和音と不協和音で構成されるカデンツ(終止)があります。文法の「でした」「ました」に相当して、フレージングの見極めにも大切なので、楽譜から読み取りましょう。譜例のト調のカデンツの例で説明すると、終止音が下からソレソシで、それらの音に向かう各声部が典型的

Ch.Simpson, *Division Viol*, 1665, 本文p.20

な動きをしていて、ソプラノは「ラ-シ」、アルトは「#ファ-ソ」、テノールは「レシ」、バスは「レ-ソ」です。バロック時代の伴奏に用いられた通奏低音(数字付低音)も和声的な書法の典型で、この低音旋律にバス・ガンバを重ねて和音を支えるのは、ガンバの重要な役割です。

舞曲の種類 (詳しくは、音楽事典などを見てください)

3拍子系；フォリア、パッサカリア、サラバンド、コレンテ、ガリアルド、ジーク、トリプラなど。

2拍子系；パヴァーヌ、バレット、パッサメッツォ、ブランル、アルマンド、ガヴォットなど。

ルネサンス時代の舞曲は、イントラダ(入場の音楽)で始まりパヴァーヌとトリプラなどがセットに組まれました。バロック時代には、プレリュード(前奏曲)から始まりアルマンド、サラバンド、クーラント、メヌエットなどが連なり、組曲といえます。同じ名称の舞曲でも、ルネサンスとバロック時代では異なることがあります。舞踏のステップも速度も、ときには拍子も様々なので、舞曲の歴史を紐解いてみると参考になるでしょう。

ルネサンス時代の器楽曲にはコンソート曲、ディヴィジョンなどがありました。バロック時代には組曲、ソナタなどの独奏曲、トリオソナタ、リコーダーなどとの合奏曲、通奏低音をガンバで重ねる伴奏、そして、オブリガートパートのあるカンタータも挙げられます。それぞれに作品の性格があり、自ら演奏するものや、聞いて楽しむもの、神に捧げるものなどがあります。また、^{ターフェルムジーク}食卓の音楽など貴族の社交音楽もありました。表題音楽は、情感の表出や情景描写を主題とする作品で、リズムの規則性よりも和音の複雑な響き、音色や間を重んじます。死者を弔う〈追悼曲〉(例えば p. 30 のマレの曲)、〈夢見る女〉や〈膀胱結石手術の図〉などでは、作者の意図を深く読み込めば、豊かな表現の可能性を引き出すことができます。

●様式のちがいによる楽譜の読み方の特徴

イタリア：声を模倣したような多声楽曲のためには、音部記号に慣れましょう。木版の小節線のない音符が読めると、分割装飾の技法を発展させたバスタールダにも挑戦できます。

イギリス：コンソートで多声楽曲を演奏するときは特に、楽譜から拍とリズムを読み取ることが大切で、またパート譜からでも総譜からでも読めると一層便利です。リラ・ヴァイオルの音楽を演奏するには、文字譜を修得しましょう。ディヴィジョンは職人的な演奏技術を愛でる即興的な音楽ですが、和音の基礎となるグラウンド(バス旋律)との関係を読み取りましょう。装飾については、イタリアの伝統を引き継いだ旋律的な装飾が使われていました。音部記号の読みかえが頻繁であることは前述のとおりです。p. 32 シンプソンの譜例参照。

フランス：17世紀から18世紀にかけてルイ14世が築いた宮廷では、建造物や庭園、家具、美術作品、舞踏、衣装、儀式、マナーなど、すべてのものが細部まで一貫した美意識のもとに創り上げられていました。このような対象に、ガンバ音楽も含まれていたため、楽譜に記載された細かな指使いや弓使い、装飾の指示は正確に守るよう再三書かれています。

【表2】 マレがヴィオール曲集の緒言で説明している記号一覧

記号	記号の名称	記号の意味
ㄱ	Tremblement (トランブルマン)	上部補助音から始まるトリル
×	Battement (バトマン)	モルデント
ㄴ	Pincé (パンセ) または Flatement (フラットマン)	2本指で行うヴィブラート(2本の指をびたりと付け、一方で弦を押え、他方で弦をごく軽く打つ。)
ㄷ	Plainte (プラント)	1本指のヴィブラート
┌	Tenue (トゥニュ)	保指(弦を押えていた指を離さず、保指の記号の範囲内にある音をすべて弾き終えるまで、押えたままにしておくこと。)
p	Poussé d'archet (プセダルシェ)	押弓
t	Tiré d'archet (ティレダルシェ)	引弓
✓	Coulé de doigt (クレ・ド・ドワ)	弾くべき音のフレットを押え、それから弦を押えたまま、ゆっくりと次のフレットまで指を滑らせる。
·	Doigt couché (ドワ・クシェ)	数弦にわたって同じフレットを1本の指で押えていくつかの音を弾く場合に用いる。
e	Enfler (アンフレ)	音量の増減記号
/	Harpègement	分散和音(アルペジオ)

マレが《ヴィオール曲集第1巻》《ヴィオール曲集第2巻》《ヴィオール曲集第3巻》

《ヴィオール曲集第4巻》《ヴィオール曲集第5巻》で用いた記号

『日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会会報』86号
(1997年9月)p.20より

装飾音符は、旋律を優雅で滑らかにしたり、不協和音を感動的に際立たせたりする効用があります。ルソー* は、装飾音符を肉の味付けに譬えて‘旋律の塩’であり、その持ち味を引き出すように節度をもって用いるべきであると記しています。また、規則からは学べない‘良い趣味’が重要とも言っています。極上のセンスを身につけるには、恐らくフランス語の抑揚ばかりでなく、宮廷の美意識の粋を求め続けねばならないのでしょう。

同じく、楽譜に書き表せない重要な演奏習慣が、フランス独特のイネガル *inégal* (不均等) です。8分音符が順次進行のときには、2、4、6個の音符をユニットとして長さや強弱を不均等に、ジャズのスイングのように演奏します。クーランは、自分たちの楽譜は言葉と同様に‘演奏するようには記譜しない’と記しています。

* J.ルソー『ヴィオラ概論』関根敏子・神戸愉樹美共訳(アカデミア・ミュージック 1988)

p. 30 の腐食銅版の【装飾記号などの弾き方は?】左から、

 が、2本指で行うヴィブラートで、パンセ又はフラットマンと呼ぶ。

 は、1本指で行うヴィブラートで、プラントと呼ぶ。

 は装飾ではなく弓使いが *tirer* つまり、引弓。ρとあれば *pousser* 押弓。

 は、書いてある音の上の音からかけるトリルで、トランブルマンといい、この場合は「ドシドシー」。

 は書いてある音から下の音を弾いて戻るバトマンで、この場合は「ソ#ファソー」。

いずれも拍や低音との関連で妙味が決まるフランス音楽の要です。この他の記号については p. 34 の表参照、更に詳しくは、ルソー(上記 pp.51-72)参照。

ドイツ：ドイツの音楽は混合様式と呼ばれます。様式に叶った演奏をするには、上記のイタリア、イギリス、フランスの音楽の理解は不可欠です。作曲家が踏まえたこれらの様式と、その上に築いた独自の作風を、楽譜の奥から読み取りましょう。

●楽譜の入手・閲覧方法

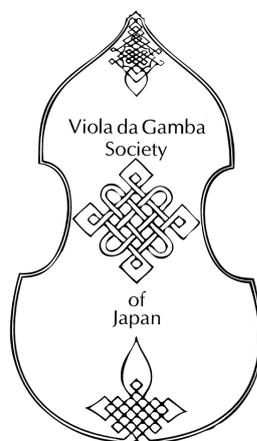
楽譜の利用にあたっては、著作権にご留意ください。

国内の楽譜販売店：東京：アカデミア・ミュージック(株)、ギタルラ社東京古典楽器センター、
大阪：ササヤ書店、京都：十字屋

海外からの入手先：出版社に直接ネットで注文でき、音楽図書館、データベースから有料・無料でダウンロードできるサイトもあります。IMSLP/Petrucci Music Library や Viola da Gamba Society of America などが有名です。違法なサイトには要注意、誤植には要確認です。

国内音楽図書館：一般利用できるのは、東京文化会館音楽資料室、東京芸術大学附属図書館ですが、ガンバ関連の楽譜や文献を多く所蔵しているのは、国立音楽大学附属図書館(東京・立川市)、上野学園大学音楽学部図書館(東京・台東区)、桐朋学園大学音楽学部附属図書館(東京・調布市)、東京音楽大学附属図書館(東京・豊島区)、慶應義塾大学図書館遠山音楽文庫(東京・港区)です。その他、宮城学院女子大学図書館(仙台)、同志社女子大学図書館音楽文献室(京都)、相愛大学図書館(大阪)、大阪音楽大学附属図書館(大阪)などでも所蔵しています。調査や研究のためであれば閲覧ができますが、館長の許可が必要など条件はさまざまです。利用にあたっては、どの図書館も事前に調べて各図書館のルールに従ってご利用ください。

日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会の会員になりませんか？
入会希望の方や、本書の他の版についてさらに詳しく知りたい方は、
当協会 <http://www.vdgsj.org> にお問い合わせください。



ヴィオラ・ダ・ガンバの手引 (PDF 版)
Handbook for the Viola da Gamba

2018年11月1日 発行

発行：日本ヴィオラ・ダ・ガンバ協会

執筆：研究誌準備委員会

編集協力・版下製作：小澤絵里子、関 聡美、折原麻美

表紙・挿絵：横田稔『こびとのおくりもの』（はなののびる
おうさまシリーズ）Sougen press 2016 © Minoru Yokota

発行所：  **アカデミア・ミュージック株式会社**

〒113-0033 東京都文京区本郷 1-28-21

TEL. 03-3813-6751(代) Fax.03-3818-4634

<https://www.academia-music.com>

ISBN978-4-87017-964-6

著作権は執筆者と当協会にあります。

Copyright © 2018 Yukimi Kambe, Makiko Imori, Hirono Aoyama, Tomoki Saito,
Yui Matsuoka, Alexander Foxcroft-Knop and the Viola da Gamba Society of Japan